魔法少女リリカルなのはstrikers～転生した紅と蒼の修羅神～

サーシェス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはｓｔｒｉｋｅｒｓ～転生した紅と蒼の修羅神～

【Ｎコード】
Ｎ７７４９Ｗ

【作者名】
サーシェス

【あらすじ】
神様にコーラをかけられて死んだ中学３年の男とその親友は神様にリリカルなのはの世界に転生させられる。魔力はないが、スパロボＯＧの修羅の覇気を持つ。しかもナカジマ家の子供として生まれることになった。彼は覇気と少しの原作知識を使いこの世界を生きていく。オリ主最強系です嫌いな人は即刻回れ右をしてください。
小説タイトル変えました

プロローグ（前書き）

はじめましてサーシェスといいます。処女作なので誤字脱字があると思いますが大目に見てほしいです。応援していただけると嬉しいです。

プロローグ

「ここどこだし」

俺は真っ白い空間にいた

「・・・確かスパロボＯＧを買いに行こうと思って家をでたはいいんだけど・・・こんなところに来た覚えがない・・・・」

「あの～」

考えていると、声をかけられた。振り返ってみると・・・・・

真っ白い服を着た女性がいた

「どちらさまですか？」

「わたしは神さまです。それと・・・すいませんでし！！」

「いきなり誤られても困るんで、簡単な説明プリーズ。」

「えっと・・ですね、間違って殺してしまいました」

「・・・・は？」

ちょっとまて！簡単すぎて逆にわからないから！！

「あの・・・もう少し詳しく・・」

「詳しく言いますと、私の部下があなたの書類にコカ・コーラをぶちまけてしまい・・・」

「・・・それで死んだと？」

「・・・はい。」

「・・そうか」

「・・・怒らないんですか？」

「別にあなたが悪いわけじゃねぇからな」

「それでですね、あなたには新しい人生を歩んでいただきたいと思います」

「フムフム」

「それであなたに渡すチカラは、３つまで与えられます。ちなみに行く所は

『魔法少女リリカルなのは』の世界です」

なのはか・・・詳しく知らねーんだよな。

能力は、あれでいいか

「じゃあ、機神拳を使えるようにしてくれ、次に鍛えれば鍛えるほど身体能力があがるように

してくれ、それとデバイスをくれ、ＢＪはヤルダバオトにしてくれ。」

神様に言うと神様は唖然としていた・・・なんで？

「俺、変な事頼んだか？」

「いっいえ、ただ他に転生した人たちは魔力値ＥＸとか王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）とか頼むのに比べて、あなたは余りにも欲がないと思いまして・・・」

なんだ、そんなことか・・・

「俺は最初から最強っていうのが嫌いなんだよ。なんていうか、努力して力を手にした人達に失礼だからね。」

「ふふっ、わかりました。これ以上は聞きません。それとあなたにはリンカーコアがありません。」

「へ？」

「そのかわりに覇気を使えるようにしました。ついでに覇気も鍛えれば鍛えるほど上がるようにしておきました。」

「・・・いろいろとありがとうございます」

「いえ、気にしないでください。それでは～」

神様が手を振ると俺の足元に巨大な穴が開いた・・・コレ落ち

た絶対

「逝ってらっしゃい～～」

「字がちがーーーーーう！！」

神様の言葉に突っ込むと同時に俺の意識が途絶えた・・・・

「おぎゃあああ！！（なんで赤ちゃんなんだ！！）」

目覚めた俺は赤ちゃん（笑）になっていた。（笑）て言うな！！

「奥さん。よく頑張りました。元気な男の子ですよ。」

？？？「ハァハァ、顔を見せてください」

？？？「ようやく俺たちの子供が生まれたんだなよく頑張ったな。クイント《・・・・》」

クイント「ええ。私も嬉しいわ。あなたも嬉しいでしょゲンヤ《・・・》さん」

ゲンヤ「ああ。ところで名前は決まってんのか？」

クイント「ええ。この子の名前はフォルカ」

ゲンヤ「フォルカ・・・いい名前だな」

俺はナカジマ家に生まれた・・・・え？

こうして無事に転生した。それと同時に新たな物語が始まった

プロローグ（後書き）

・・・キャラの口調がわかりません。
もしおかしければいってください。
次から原作に入ると思います。
感想などお願いします。

第1話「相棒（デバイス）との出会い」（前書き）

原作入るといいましたがＳｔｒｉｋｅｒｓに入るまでの空白期間を何話か書こうと思います。デバイスを喋らせる時は日本語です。
名前を元に戻しました。フォルカ→リュウト→フォルカこんな感じです
それでは・・・どぞ

第1話「相棒（デバイス）との出会い」

第1話「相棒（デバイス）との出会い」

よぉ、フォルカ・ナカジマだ。俺が生まれてすでに5年が過ぎた。ただ赤ちゃんになることはあらかじめ説明して欲しかった。この5年は俺にとって黒歴史なので触れて欲しくない。ん？何があったか教えてくれ？そこは・・・まぁ、察してくれ。・・・だけどまぁ黒歴史以外に何があったかだけを話そうと思う。

その1

体を検査したときに俺にはリンカーコアがなかった。このことを知った父さんと母さんは結構驚いていた。だけどその代わりにレアスキルに『覇気』というものがあるとわかった。今の覇気を魔力に換算するとCランクで練習すればどこまでもランクが上がるらしい

その2

これは容姿についてだ。見た目はフォルカなんだが・・・髪が赤いのは想定外だった。普通、髪の色は両親のどっちかに似ると思ったが、覇気の影響で髪が赤いのではないかというのが医師が立てた予想だった。本当に何でだろうか・・？

ふふ、ご都合主義に決まってるじゃないかw

wby作者

ん？今何か聞こえたような・・・気のせいか。まぁこんなところかな？大して思いつくことねーしな。そして今の俺はミッドチルダにある一軒家に住んでいる（イメージはまんまｖｉｖｉｄ出てくるナカジマ家の家）

「フォルカ～晩ご飯できたわよ～」

「ほーい」

階段を降り、食卓に向かう。

「席に着いたわね。それじゃあ、せ～のっ」

母さんが掛け声をかける。

「「「いただきます！」」」

それと同時にご飯を食べていく。俺と父さんのご飯の量は普通なのだが、母さんの食べる量はハンパじゃなかった。確実に俺たちの食べる量の５倍は食べていた・・・・今は慣れたからたいしたことではない。

「そういえば、フォルカは将来はどうするんだ？」

父さんが突然そんなことを言い出した。

「俺は管理局に入って魔導師になりたかったんだけど・・・」

「でも、フォルカには魔力がないものね・・・」

ごもっともです

「そうだな・・・。たとえばお前の覇気で使えるデバイスがあればいいんだがな。」

「ははは。でもそんなの都合よく作れるわk「ピンポ～ン」オロ？」

突然、家のインターホンが鳴った。

「こんな時間に誰かしらね？」

時計を見るとすでに9時を回っている

「クイント俺が出てくる。」

父さんは玄関に向かっていった。数分達、父さんが小包みをもって戻ってきた。

「父さん。それになにが入ってるの？」

「俺にもわからん。今あけるから待ってろ」

父さんが小包みを開けていく。いつの間にか母さんもいた

「開いたぞ」

小包みがあき、三人が中を覗く、すると中には・・・・・

「バングルと・・・本と手紙？」

そう中には中心部に赤い宝石がある白いバングルと古びた本と手紙が入っていた

「手紙は私が読わ」

母さんが手紙をみる

「えーとなになに、『箱の中にあるバンクルはデバイスでこれは魔力では発動せず、覇気と言う物でしか発動ができません。しかもこのデバイスは普通のデバイスとは違い強度が強く体全体に纏う鎧のようになっています次にその本は『機神拳』と呼ばれる武術が載っていて覇気を扱える者のみが習得できるものです。あなた方の息子に覇気が使える子供がいると風の噂で聞き、送らせていただきました。あとデバイスには名前がないのでいい名前をつけてあげてくださいね♪

通りすがりの神様より。』だって」

神様や・・・もうちょっといい方法あったんじゃね？

父さんと母さん唖然としてるよ。コレ絶対「怪しいから捨てるわね～～」みたいな感じ

になるだろ。とか俺は予想していた。・・・だがこの予想は大きく裏切られた。

「フォルカ、取り合えずつけてみたら？」

「は？」

「そうだな。ためしにつけてみたらどうだ？」

「え！ちょっとまって！」

この両親は警戒心っていうものがないのか！？普通つけさせねーだろ！絶対！！

俺は二人に理由を聞いてみた。

「「えっ、おもしろそうだから」」

この答えを聞いたときのオレの顔はこんな感じだったのだろう（。д。）ポカーン

「わかったよ。じゃあつけてみるね。」

もう何も言っても無駄だとさとったのでしぶしぶバングルを右手につけたすると

『起動確認。あなたが私の主ですか』

「ああ」

デバイスの質問に俺はためらいなく答える。

『了解。主の名はなんといいますか』

「俺の名はフォルカ・ナカジマ」

『主を認証しました』

認証が終わったときに、ふと思い出した

「おまえの名前はあ確か決まってないよな？」

『はい。ですので主がつけてください』

「お前のイメージがわからないから一回セット・アップしてくれないか？」

『御意』

その言葉と同時に俺は一瞬光に包まれ，光がはれるとそこには、全身が紅い装甲で頭もヘルメットのような物に包まれそこから白い髪の毛が伸びていて、その姿は獣を思わせるような物だった。

『展開完了』

その言葉を聞き父さんと母さんのほうを向くと・・・

「こいつは・・・スゲーな」

「想像以上にすごいわね・・・」

など、感想を述べていた。ってか名前考えないとな。うーん・・・おっこの名前はいいな

「父さん、母さんこのデバイスの名前が決まったよ。」

「どんな、名前なんだ？」

「この子の名前はアレス」

「アレス？どういう意味なの」

「この前図書館でみた地球の本に載ってた戦の神っていうのがあったからピッタリだと思ったから」

「アレスか・・・確かにその姿にピッタリの名前だと思うぞ」

「ええ。私もそう思うわ。」

「よっしゃあ！それじゃあ、今日からお前の名はアレスだよろしくな！」

『はい。素敵な名をつけていただきありがとうございます。』

「そんじゃ、これから一緒に頑張っていこうぜ！！」

『はい。主』

俺は今日大切なパートナーと出会いこれから頑張ることを誓った。

第1話「相棒（デバイス）との出会い」（後書き）

いかがでしたか？
グダグダしてしまいました。
感想など待ってます。そして寝るｚｚｚｚ

次回もよろしくお願いします

第2話「俺は姉妹と出会い」（前書き）

（－ω－）グー…Σ（・□・）はっイカン、イカン
グダグダですが
みてくれると嬉しいです
では・・・・どぞっ

第2話「俺は姉妹と出会い」

第2話「特訓の姉妹と出会う」

「せいや！！」

ドゴォォォン！！

目の前にある岩に目掛けて覇気を纏った右腕で殴ると、殴った所から亀裂が走りそれが岩
全体に走ると岩が砕け散った。

「ふぅ～」

『お見事です。主。』

「ありがとな。アレス。」

俺は今、ミッドの近くにある森にきていた。相棒をもらってから6年。この6年間ひたすら
覇気と機神拳を使いこなせるように特訓した。そのため今では覇気のランクがAランクぐらい
になっている。機神拳も神化時以外の技は使いこなせるようになっている。この6年アレス
とは信頼関係を築くことができ、今では主ではなく名前で呼んでくれるほどになっていた。

『フォルカ。今日はお母様が会わせたい子達がいるといってませんでしたか？』

「ん？あ～そういえばそうだったな。」

思い出した。今日家から出るとき『あなたに会わせたい子達がいるの』といっていたことを

『フォルカ。もう少ししっかりしてくださいよ？』

「悪い悪い。そんじゃ、転移たのむは。」

『わかりました』

ん？なんで魔力ないのに転移できるのかって？それについては無問題アレスが言うには覇気でも転　移、念話、身体能力強化ぐらいならできるらしい。なのでアレスを常に持っていないといけないのだ　説明はこんなんでいいか。んじゃ転移。

『転移完了』

とアレスがいうと家に着いた。

「母さんただいま。」

『お母様。今帰りました。』

「フォルカ、アレスお帰り。」

声をかけるとすぐに出迎えてくれた。お、そうだ

「母さん。今日紹介したい子達がいるっていってたけど・・・」

「そうだったわね。今つれてくるから待っててね。」

そういうと母さんは部屋を出ていった。数分経つと母さんが入ってきた・・・・・

ショートカットの女の子とロングヘアーの女の子連れて・・・

へ？

「フォルカ紹介するわね。こっちのロングヘアーの子がギンガ。で、ショートカットの子がスバル　　よ。今日からこの子達は家族になるの。つまりあなたの妹になるのよ」

「私は・・・ギンガって言います・・よろしくお願いします」

「えっと・・・スバルです・・・よ、よろしくおねがいします」

怖がりながらも挨拶をしてくれた・・・俺って怖いのか？

「えーと、俺フォルカっていうんだ。こっちは相棒のアレス」

『ギンガさん、スバルさん。アレスです。よろしくお願いします』

「「よっよろしくおねがいします」」

「そうだ。スバル、ギンガ。俺はお前たちのお兄ちゃんだからな。好きに読んでいいぞ。」

「・・じゃあ、わたしはフォルカ兄さんって呼びます！」

「私は・・・フォル兄って呼ぶ！」

とギンガとスバルが言う。もじもじしながら言う姿を見ると小動物のように見えて

癒されるの～～＋：。・・・＊：のほ（＊´∀、＊）ほん：＊・。。・＊和むの～～＋。＊。：。＋（＊´∀、＊）＋。：。＊＋

ギューとしてしまいたい！

「んじゃ。改めて。よろしくな。ギンガ、スバル！」

「「うん！フォルカ兄さん／（フォル兄！）」」

「仲良くなったところで、それじゃあご飯にしましょう！」

「「「は～い！」」」

そうして4人で食卓に向かった・・・・

こうして俺に2人の妹ができた。

余談だがギンガとスバルが母さん並みにご飯を食べていたので（。д。）ポカーン←こうなったのは

仕方がないと思う・・・・

第2話「俺は姉妹と出会い」（後書き）

いかがでしたか。キャラの口調は合ってましたか？
次はフォルカの前世の親友の転生者を出そうと思います
その転生者の容姿がわかりますか？っていうかアイツしかいない。
感想・意見他いろいろまってま～す

そんじゃお休みなさい（○ｕωｕ＊）☆

第3話「現れた転生者は前世の相棒」（前書き）

白き修羅さん感想ありがとうございます。

タイトルのとうり転生者がでます

それでは・・・どぞ

第3話「現れた転生者は前世の相棒」

第3話「現れた転生者は前世の友」

スバルとギンガがナカジマ家の一員となって1ヶ月が過ぎた。最初はまだ家になじんでいなかったが
日に日にそれもよくなり、今はすっかりなじみ家族となった。俺は今日、陸士訓練学校に入学した
学校長の話が終わり、今は新入生が二人一組のパートナーを組んでいる。俺は容姿の事もあり、
色んな子達（女子が9割）からパートナーを組まないかと誘われているがある事情によりすべて断っている。どんな事情かって？それは今から説明しようと思う。あれは昨日のことだった・・・・

～回想～

俺はシャワーに入り寝ようとしていたときだった。

『フォルカ。メールがきました』

「ん？わかった。読んでくれないか？

『了解しました。・・『こんばんわ。神様だよ、元気にしてる～？
今日メールを送ったのはあなたの
世界にもう一人の転生者を送ったよ～。この子は君の前世の友達で
君と同じく機神拳を使えるからね

多分、顔を見たらわかるんじゃないかな？この子には君の姿など説明してあるから。そうそう明日
この子を陸士訓練校に送るからね。パートナーになってあげてね？
神様より『だそうです』

～回想終わり～

いまいちわからないが本当にこんな感じなんだ。前世の友はあいつしか思い浮かばない。だから
そいつに会うまではペアを決めないつもりだ。

「いつになったら来るのかね～？」

「君、少しいいか？」

声をかけられた方を向くとそこには・・・

「屋上で話をしたいんだが・・」

見た目がスパロボＯＧ外伝のフェルナンド・アルドゥクの人がいた

「いいぜ」

そして二人で屋上に向かった・・・

～屋上～

「で、話って？」

俺は聞いてみたすると・・

「久しぶりだな■●×●」

こいつ俺の前世の名前を・・・もしかして

「おまえが神様のいってた転生者か？」

「そうだ。名前はフェルナンド・アルドゥク。前世の名は××●×だ。元気にしてたか？親友」

こいつは前世で俺とよくつるんでいた親友だった。・・・だがそれ以前に

「てか・・お前なんで死んでんの？」

そうだ。こいつは死ぬのがおかしい。こいつは自動車にひかれてもけろっとしているやつなので

死んでることに疑問だった

「あ～それはな、神様に殺されたのよ・・・サイダーかけられて・・・グス」

あの神なにしてんの！？簡単に人殺し過ぎなんだよ！しかも死んだほうから見ればコーラやサイダー

かけられて死ぬのは恥ずかしいんだよ！

「その・・なんだ、俺もそんな死に方だからなくな」σ（；＿q）

ゞ（；´д`）元気をだせ・・・

「わかった。そういえば俺の相棒紹介してなかったな。」

そういって蒼の宝石が輝くバングルを見せてきた。

「こいつは俺の相棒でオーガっていうんだ」

『初めましてフォルカ様。デバイスのオーガといいます』

へぇ～こいつも礼儀正しいな

「よろしく。んじゃフェルナンド、俺の相棒も紹介するは。」

そういって俺も紅い宝石が輝いているバングルを見せる

『初めましてフェルナンド様。フォルカの相棒のアレスと申します』

「へ～それがお前のデバイスか・・・ＢＪはヤルダバオトなんだろ。」

「そういうお前のは、ビレフォールなんだろ。」

「当然だ！俺はビレフォール好きだからな。」

そう。こいつは俺がヤルダバオトが好きなぐらいビレフォールがすきなのだ。

それから少し世間話をした。

「話はここまでにして・・・俺とパートナー組まないか？」

話を切り上げ。聞いてみた。

「当然じゃねえか！ていうか俺はお前以外とは組まないぞ？だって俺の相棒だからな！」

こいつは・・・うれしいことをいってくれるぜ

「それじゃあ、よろしくな。フェルナンド」

「こちらこそだ。フォルカ」

俺たちは互いに手をとり握手した。

こうして俺はフェルナンドとパートナーを組んだ。

第3話「現れた転生者は前世の相棒」（後書き）

少し変な感じがしますが、いかがでしたか？
フォルカの相棒はフェルナンドしかいない！！
と作者は思ったのでこうしました。
次は訓練校卒業式で二人の対決。そしてあの人が！！

次回「対決！紅き戦神ｖｓ蒼き鬼神」です

感想まってます

第４話「対決紅き戦神ｖｓ蒼き鬼神前編」（前書き）

イヤッフーーサーシェスだ

フォルカＶＳフェルナンドの前日です

では・・どうぞ

第４話「対決紅き戦神ｖｓ蒼き鬼神前編」

第４話「対決紅き戦神ｖｓ蒼き鬼神前編」

よぉ、フォルカだ。フェルナンドとパートナーを組み、早1年。俺たちは二人で首席だった。
訓練の時、俺たちのＢＪはとても目立っていた。その中でどんな訓練も負けなしでクリアー
していき、その中で俺たち二人には二つ名がついていた。俺の二つ名は「紅き戦神」フェルナンド
の二つ名が「蒼き鬼神」という二つ名がついた・・・そこ中二病くさいとかいうな！そして
明日は陸士訓練校の卒業式。俺たちは普通に卒業できると思っていたが、そうはいかなかった。
今俺たちは校長室に呼ばれていた。

フォ・フェ「「卒業模擬戦？」」

校長「そうです。今までは普通に卒業していたんですが、今年から新しく追加されたもので
訓練校を卒業する生徒の中から優秀な1組を選んでそのパートナー同士で模擬戦をするという
うものです。受けてくれますか？」

フォ「俺は別にかまいません」

フェ「俺もかまいません」

校長「では、お願いしますね。」

フォ・フェ「「失礼しました」

そうして俺達は校長室を出て家に向かった。

～帰り道～

フェ「そういえば思ったんだがよ」

フォ「どうした？」

フェ「なんでレジアス中将が見にくるんだ？」

そう。なぜかはしらんがあしたの卒業模擬戦はレジアス中将が見に来るのだ。しかも一般公開されるそうだ

フォ「俺はわからん。アレスお前はどう思う？」

ア『わたしにもわかりません』

アレスでもわからんか・・・

フェ「ん？一般公開されるってことはおまえの家族も全員くるのか

？」

フォ「今日聞いてみる。たぶん全員来ると思うだがな」

フェ「それもそうだな。」

フェルナンドは訓練校の帰りに家によってたまに飯を一緒に食べるので俺の家族とは認識がありこいつが機神拳を使えることも俺の家族は知っている。スバルとギンガに「お兄ちゃん」と呼ばれたとき、鼻血をたらしていたが・・・

フォ「もうこんなところか。俺こっちだから」

フェ「おう。そうだ。明日はぜってに負けねーからな！！」

オ『明日の勝負には勝たせてもらいます』

そう俺達は訓練校のとき、たまに模擬戦をしていて、１９戦１９引き分けと俺達の勝負は
中々勝敗が決まらなかった。

フォ「言っておけ。明日勝つのは俺達だ」

ア『そのとおりです』

コツン

俺達は互いの拳を合わせ家に向かった。

～ナカジマ家～

フォ「母さん、父さん明日卒業式で卒業模擬戦ってのをやるんだけど見に来る？」

ク「私達はいくわよ。うちの隊長とメガーヌたちと一緒にね」

ゲ「お前の戦っている所は始めてみるからな。楽しみにしてるぞ」

ギ「フォルカ兄さん。私とスバルも行くから・・・絶対勝ってね」

ス「フォル兄。絶対勝手ね！！」

フォ「ああ！それじゃあ俺寝るから」

「「「「「おやすみ／なさい」」」」」

～自室～

俺はベッドに横になり自分の相棒をみていた

フォ「アレス」

ア『はい』

フォ「明日は絶対勝つぞ」

ア『もちろんです』

そういい、目を閉じる。そして俺はすぐに寝ていた。

第４話「対決紅き戦神ｖｓ蒼き鬼神前編」（後書き）

長くなりそうだったので前編、後編に分けました
やっぱりまだ、キャラの口調が微妙ですね。

そして次回紅き戦神と蒼き鬼神が衝突する！

感想まってます

第５話「対決紅き戦神ｖｓ蒼き鬼神後編」（前書き）

お気に入りが１５件突破していました。見てくれているかたありがとうございます

今回初めて戦闘描写を書くのでおかしなところもあるかもしれません。

それでは始まります。

第5話「対決紅き戦神ｖｓ蒼き鬼神後編」

第５話「対決紅き戦神ｖｓ蒼き鬼神後編」

～陸士訓練校グラウンド～

ようフォルカだ。これから卒業模擬戦が始まろうとしている・・・
だがさすがにこれはないだろ。
グランドに設置されていた観客席はすでに満員で今か今かと待って
いて、ＶＩＰ席にはレジアス中将
やゼストさん、メガーヌさんと俺の家族がいた。みんな楽しみにし
ていたが意外なことにあの
レジアス中将も楽しそうにしているのがここからでもわかる・・・
なんでか？それはここから
でもわかるぐらい笑顔でグラウンドを見ているからだ。おっとそろ
そろだな。

「これから卒業模擬戦を始める前に選手を紹介したいと思います。」

一瞬にして場が静まった

「まずは訓練校の紅き戦神！フォルカ・ナカジマーーー！！！」

うおおおおおおおお

うるさいほどの歓声。中からは「フォルカ様〜〜〜」「素敵〜〜〜」とか「お兄ちゃんガンバレー」
などが聞こえ俺は手を振りそれに答えた。

「続きまして訓練校の蒼き鬼神！フェルナンド・アルドゥクーーーー！！！」

うぉぉぉぉぉぉぉ

こっちと同じように中から「フェルナンド様〜〜〜〜」などが聞こえ、フェルナンドも俺と同じ
ように手を振っていた

フェ「今日こそは絶対勝ってやるからな！」

フォ「ああ。望むところだ！」

「それでは準備はいいですか？」

フォ「ああ」

フェ「俺もだ」

「それでは・・・始め！！」

フォ「アレス！」

フェ「オーガ！」

フォ・フェ「「セットアップ！！」」

ア・オ『『了解。セットアップ』』

セットアップすると同時に紅と蒼の光に包まれる。徐々に光が弱まっていくとそこにいたのは
全身を覆う紅い鎧を纏う戦神と蒼き鎧を纏う赤い髪の鬼神がその場に立っていた。

フェ「いくぞ！！」

フォ「かかって来い！」

その言葉と同時にフェルナンドが右足を後ろに引くその瞬間フェルナンドはそこにはいなく、フォルカの後ろに回り込んでいた。

フォ「前より速い！」

フェ「ぬぅん！」

スガンッ！！

反応が一瞬遅れたフォルカはフェルナンドの裏拳をくらい

フェ「うおおおお！！」

ズガガガガガァ！

そのまま、連続蹴りで上に飛ばされた・・・・だがフォルカは空中で体制を整え・・・

フォ「機神爆砕撃！」

フォルカは重力を利用し膝をフェルナンドに向けて一直線にに落ちてくる。

フェ「くっ！」

ドゴォォォォォン！

フェルナンドはギリギリ避け、距離を開けフォルカの落ちたところに目を向ける。

フォ「チッ！外したか」

フォルカが落ちた場所は半径１ｍのクレーターができていた。

フェ「ちょっおまっ！そんなん喰らったら死ぬだろ！！」

フォ「大丈夫だ。当たったら、全治二ヶ月ですむ。」

フェ「ぜんぜん、大丈夫じゃねーー！」

フォ「そんな事ｙ「無視スンナ！」お前、前より速くないか？」

フェ「スルーすんな！・・・まあ、今回は本当に勝ちたいから特訓したんだよ」

フェルナンドは構えを取った。
フォ「そうか・・・」
そういいフォルカも構えを取る。
フォ「だが、勝つのは俺だ！！」
その言葉で紅と蒼は再び衝突した・・・

～ＶＩＰルーム～
ス「二人ともすご～～い！！」
ギ「本当にすごい！！」
スバルとギンガ以外、みんな唖然としていた。
ク「まさか、フォルカがここまですごいだなんて・・・」
メ「でも、フェルナンドっていう子も中々やるわね・・・」
ゼ「ゲンヤ彼らから魔力反応がないのはなぜだ？」
レ「それは、どういう事だ？」
ゲ「それが内の息子とフェルナンドにはリンカーコアがないんだ。」

「「「！？」」」

それを聞いて驚く三人

メ「クイントどういうこと！」

レ「ゲンヤ！それでは彼らのデバイスが使えないのではないか！？」

ゼ「どういうことなんだ？クイント、ゲンヤ」

ク「フォルカとフェルナンドは魔力を持たない代わりに覇気というものをもってるの」

レ「覇気？それはいったいなんなんだ？」

ゲ「覇気はあの二人には魔力のようなもので、転移、念話ぐらいは使えるんだがそれ以外は使えねぇんだ。だがその代わりに機神拳を使っている。」

メ「機神拳？聞いたことないわね」

ク「機神拳は覇気を扱えるもの以外は絶対に習得できない拳法で、あのデバイスも覇気に反応するみたいなの」

レ「ますますわからんな・・・」

レジアスは顎に手を置き、「うむ」など唸っていた。だがそれもゼストの言葉に遮られた。

ゼ「そろそろ決着がつきそうだな」

その言葉に視線がグランドに向いた。そこには・・・

二人が両手に覇気をためている時だった。

～グランド～

そこでは二人が両腕に覇気をため、そして・・・

フォ「機神双獣撃！」

フェ「機神双衝撃！」

ドガァァァァン！

二人から放たれた覇気は獣の形をし、それぞれが放った覇気とぶつかり爆発した。

フォ「ハァハァ」

フェ「ゼェゼェ」

煙が晴れるとフォルカとフェルナンドが肩で息をしながら立っていた。

フォ「フゥ・・・フェルナンド」

フェ「ゼェ・どうした？」

フォ「俺もさすがに疲れた・・・だから次で最後だ！」

フェ「望むところ！」

フォ「アレス！」

フェ「オーガ！」

ア・オ『『了解！』』

すると二人の体全体に覇気が纏われ、それを確認すると二人は構えを取り・・・

フォ「最後に・・・」

フェ「勝つのは・・・」

フォ・フェ『俺だ！！！』

二人は一瞬で近づき、それぞれが乱打を浴びせる。フォルカが殴れば、フェルナンドが蹴り。
フェルナンドが防げば、フォルカも防ぐ。その繰り返しだった。さっきまで騒いでいた観客
も黙って見ていた。それもそのはず、今の二人の戦いは荒々しいが綺麗な演舞を踊っている

ようにしか見えなかった。・・・だがそれは長くは続かなかった。
二人の拳がそれぞれ決まり
二人は距離を開け、同時に飛び・・・

フォ・フェ『機神！』

フォ・フェ「「猛撃拳！！！／轟撃権！！！」」

二人が飛び蹴りを放つ。そして二人がすり抜けるように背中を向けたまま、１０ｍのところで着地
した。静寂・・・二人はそれから動かなかった。そして・・・

ドサッ・・・

二人が同時に倒れＢＪが解かれる・・・観客など全員が呆然としているなか、審判が我に返り

「こ、今回の卒業模擬戦は引き分けです！」

うわあああぁぁぁぁぁぁぁ！！！

あふれんばかりの歓声や拍手。観客は全員が立ちスタンディングオベーション。
その中で気絶している二人の顔はうれしそうな顔をしていた。

こうして、卒業模擬戦「紅き戦神ＶＳ蒼き鬼神」は両者引き分けに終わった・・・

第5話「対決紅き戦神ｖｓ蒼き鬼神後編」（後書き）

戦闘描写微妙だな～～それとながくなってすいません。

オリ技紹介　　機神爆砕撃　イメージは電童の『爆砕重落下』

次回はキャラ紹介です。

戦闘描写についての感想や、その他どしどしまってます

キャラ紹介（前書き）

キャラ紹介です

キャラ紹介

名前フォルカ・ナカジマ

１１歳

身長１６０ｃｍ　体重４０ｋｇ

容姿フォルカ・アルバーグを少し幼くした感じ

性格

普段はあまり怒らないが、怒ったら管理局の白い悪魔も逃げ出すほど

デバイス名　アレス

待機状態　紅い宝石がついたバングル

発動時はまんまヤルダバオトで頭部も隠されており顔が見えない

技は機神拳とオリ技多数

フォ：ずいぶん簡単な紹介だな。

サ：ｓｔｓキャラ紹介の時に正確なことが決まる。

フェ：じゃあ次は俺だな

名前フェルナンド・アルドゥク

１１歳

容姿まんまフェルナンド

身長、体重はフォルカと同じ

性格

おちゃらけてはいるがやるときはやる男

デバイス名　オーガ

待機状態　蒼い宝石のついたバングル

技はフォルカとほぼ同じ

フェ：ねぇ！俺の紹介フォルカよりひどくね！？

サ：大丈夫そのうちちゃんとしたのを考えるから。

フェ：作者がバカだから・・・

ブチ

フォ：バカ　フェルナンド早く逃げろ！！

フェ：へ？

サ：誰がバカ作者か！！　　喰らえ！『無月』

フェ：ぎゃあああ

フォ：（作者だけは怒らせたらだめだな）

キャラ紹介（後書き）

これは今の大体のキャラ設定です
ｓｔｓ時にはもっと詳しく紹介します。

次回もお楽しみに！

ドサ

「なんか落ちてきた」

第6話「コワレタココロ」（前書き）

どーも、サーシェスです。

今回はシリアスが入ります

それでは・・・どぞ。

第6話「コワレタココロ」

第６話「コワレタココロ」

卒業模擬戦が終わり、１年が経った。俺は父さんのいる陸士１０８課にいる。俺達はあの後レジアス中将
と会い、「管理局に入らないか？」と言われ、今にいたる。入るなら、「自分の親がいるところがいいだろう」というレジアス中将のご好意でフェルナンドと一緒に１０８課に配属になった。最初は慣れなかったが今では隊の人たちとは親しくなっている。しかし、俺達の二つ名は「紅き戦神」、「蒼き鬼神」
はそのままだった。家族関係も良好だった。スバルとギンガは俺に影響され、母さんから、シューティング・アーツを教えてもらっている。家族でいるときは、みんな終始笑顔だった。
だがそれは長くは続かなかった・・・・

～ナカジマ家～

ス「お母さんいつ、帰ってくるの？フォル兄」

ギ「お母さんに何かあったのかな？」

フォ「確かにな、いつもなら3日ぐらいには帰ってくるんだけど・・・」

そう、いつもならどんなに遅くても3日以内に帰ってくるはずの母さんが1週間経っても帰って来なかった。それから30分ぐらいたったすると・・・

PIPIPIPI

家に一本の電話が入った。

フォ「俺が出るよ」

そういって受話器をとる

フォ「はい、ナカジマですが？」

ゲ「ああ、俺だ」

電話は父さんからだった。

フォ「父さんどうしたの？」

ゲ「フォルカ、落ち着いて聞けよ」

フォ「え、ああ」

ゲ「母さんが死んだ・・・」

フォ「え？」

その言葉を聴いたときにピシリッと何かに罅がが入る音がした・・・

ゲ「今からスバル経ちをつれて１０８課に来てくれ」

フォ「わかった・・」

俺は半信半疑だったが、スバルたちをつれ１０８課に転移した。

～１０８課～

俺がそこにつくといくつかの死体袋があった。父さんによるとある施設にゼスト隊が調査に向かい、そこで、襲撃を受け、母さんを含む部隊員は全員死亡。ゼストさん、メガーヌさんは行方不明だそうだ。

母さんが死んだと伝えられた、スバルとギンガはずっと泣いていた。父さんも唇をかみ締めていた。俺は悲しいと思っているのに涙が出てこなかった・・・・

スバル達が泣きつかれて寝たとき、俺と父さんは母さんの死体袋のあるところに向かい、そのチャックをあけた・・・・

そこには

全身が血だらけで左腕と右足がなく体のいたるところに傷があった。いつも笑顔だった母さんの顔も二度と見ることがなくなった・・・・

ピシピシ

そのことがわかると怒りがこみ上げて来た・・なにかにも徐々に罅が広がっていくのがわかる

怒りを通り越して憎い母さんを殺した奴が憎い！

そしてその感情がココロのなかに満たされる・・・・・そして

憎悪

バリン！！

俺のココロが『コワレタ』

第6話「コワレタココロ」（後書き）

初めてのシリアス！
なんか無理やりシリアスにしたかんが・・・・
次回はフェルナンドがフォルカを助けるような感じになります。
感想など待ってます。

第7話「憎悪の『神化』」（前書き）

今回はフェルナンド対フォルカです

うまくかけてるか心配ですが

ゆっくり見ていってください

第7話「憎悪の『神化』」

第7話「届け！友の思い！」

～フェルナンド～

こっちからの視点は初めてだな。クイントさんが死んだと聞いて1週間がたった。陸士108も最初の頃は活気がなくなっていたが、今では元に戻りつつある。・・・・フォルカを除いて。

フォルカはあれからおかしくなっていた。まずは一人で仕事に行くようになった。前は俺か、その他の隊士達と行っていたが今ではどれも一人でこなしている。次に周囲との会話がなくなった。最後にフォルカ自身とデバイスだ。フォルカの目からは復讐の感情鹿見えていない。そのせいか、BJの色が綺麗な紅だったが、それが漆黒に変わり、髪も同じく漆黒に染まり目は血のような色になっていた。
ゲンヤさんが休暇を命令しても無視し、仕事に出ている。スバルちゃん、ギンガちゃんも心配していた
そして、今俺はゲンヤさんに来るように言われた・・・

～部隊長室～

コンコン

「フェルナンドです」

「入ってくれ」

「ゲンヤさん、頼みたい事とは？・・・・」

「頼む！フォルカを助けてくれ！！」

そういい、ゲンヤさんは頭を下げた・・・ってちょっ！

「ゲ、ゲンヤさん！頭を上げてください！」

「頼む！救えるのはおまえしかいないんだ！！」

「わ、わかりましたから！頭を上げてください」

「本当か！？」

「ええ。もとよりそのつもりです」

「フェルナンド・・・息子を頼む！」

「わかりました！」

よし、そうと決まれば・・・

「オーガ」

『はい』

「行くぞ！」

『了解！』

フォルカとアレスの元へ行かなければ！

～訓練所～

「俺に何のようだ・・・」

俺はフォルカを訓練所に呼んだ

「フォルカ！俺と勝負しろ！」

「そんなことか・・・断る」

くそ、やっぱり一筋縄じゃ行かないか・・・

「へぇ～じゃあ逃げるのか。」

「何だと？」

食いついてきた！あと少し！

「復讐に燃えているお前が俺に勝てるわけがねーんだよ」

「ほぅ・・・いいだろう。相手になってやる。」

「オーガ！」

『了解。セット・アップ』

俺はビレフォールの鎧に包まれる

「・・・セット・アップ」

その言葉で漆黒の鎧を纏ったヤルダバオトの姿で出てきた

アイツ！ＡＩを封じていやがる！！

「・・・・・・」

「・・・・・・」

二人は無言で構えを取り・・・

「おおおおお！」

「・・・・・」

ぶつかり合った。

「・・・」

先に仕掛けてきたのはフォルカ。右足を引き飛び、一瞬にして裏拳を叩き込む

「それはよんでいる！」

しかしフェルナンドはそれを避け

「はぁ！」

バキィィン！

正拳突きをを放ち怯ませる。そこから流れるように足払いをし、

「機神三連撃！」

ドガァァン！！

最後に鉄拳を叩き込む

「くっ」

それをもろに喰らいふっ飛ぶがすぐに体勢を立て直し、右手に覇気を溜めるそして、

「覇龍！」

右手から龍の形をした覇気を打ち出す。だが

「それもよんでいる！」

と左手に溜めた覇気を同じ龍の形にして打ち出す

ドガァァァン！！！

それがぶつかり合い爆音がなり、煙に覆われる。

「今のお前の行動は読みやすいんだよ。」

「・・・」

煙の向こうにいるフォルカに聞いてみるが返答がない・・・

「いまの俺に勝てないのかお前は？」

「・・れ」

「そんな奴が復讐に行ったところでなぁ！勝てるわけがねぇぇんだよ！！」

「だまれぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！！」

あいつが叫ぶと一気に煙が晴れる。そして黒い覇気に包まれる、そしてＢＪが禍々しい形で赤いラインが入り、両肩には大きな目玉がつき、後ろには真ん中に穴が開いている歯車のような物と翼がついている。　そして顔を上げ

「ガァァァァァァァァァ！！！！」

叫び一気に近づく、俺はとっさにガードするが・・・

「なっ！」

あいつはガードも関係なくそのままオレを殴り飛ばした。勢いが強

すぎて、体勢を立て直せなかった

「ガハッ！」

そのまま壁に激突した。オレは急いでアイツの方に視線を向ける

「おいおい、ありゃ反則だろ。」

オレが見た先では右手に膨大な紫色の覇気を溜めている姿が目に入った。・・・そして

「ガァ！」

それは無常にも放たれ、俺に近づいてくる。

「くそ、オレはここまでなのか・・・」

オレは目を瞑る・・・だが

『諦めないでください！』

「オーガ！？」

オーガが怒鳴りをあげる。

『私はまだ戦えます！それなのに、あなたが諦めてどうするんですか！フォルカ様を助けると
ゲンヤ様と約束したのではなかったのですか！？』

「息子を頼む」

そこでゲンヤさんとの約束が思い出される。

「・・・そうだな、そうだったな！俺達は約束を果たさないといけねんだよな！」

『はい』

オレとオーガが喋っているなか、放たれた覇気は俺との距離を半分に縮めていた

「オーガ」

『はい」

覇気との距離は１０ｍを切った

「まだいけるな！」

『もちろんです！』

覇気がもう目の前まできているが関係ない！

「俺達はおまえに勝たなきゃいけないんだぁぁぁ！！！」

そして覇気の当たる寸前、オレは蒼い光に包まれた・・・・

第7話「憎悪の『神化』」（後書き）

黒いヤルダバオトの神化はビレフォールの神化とラハ・エクスティムをたして
2で割ったカンジです。

次回もお楽しみに！

感想待ってます

第8話「決意の『神化』」（前書き）

フェルナンド対フォルカもいよいよ大詰め！

ゆっくり見ていってください。

第8話「決意の『神化』」

第8話「『決意の『神化』」

蒼い光が晴れると前より禍々しくなったＢＪ、体中についた赤い玉、
そして両肩に
ついている目。赤い髪はボロボロの赤いマントになっていた。

そして構え

「いくぞ！これが神化をとげた俺たちの力だ！」

フェルナンドは吼えると、先ほどとは比べられない速さで、近づき

フェ「はぁぁ！」

鉄拳を叩き込む。さらに拳から真空波が起き、吹き飛ばす。

「ガァッ！」

吹き飛ばされたアイツは受身を取り殴られたところをおさえ、よろ
よろと立ち上がる。
やれる！この力なら！

「うぉぉぉぉ！！！」

雄たけびと共にオレは駆け出した。

目を開けるとそこには視界を染める漆黒。
辺りを見渡しすが、どこまでも続く、漆黒

「ここはどこだ？」

あたりを見渡し考える。すると

・・・・い

どこからか声が聞こえる。

・・・くい

耳を澄まして聞く

憎い

憎い　そう俺にははっきり聞こえた

憎い

憎い憎い

憎い憎い憎い

言葉が増えると共に無数の手が俺を掴んでくる。

「離せ！」

どんなに手を振りほどいても、手が増え俺を掴んでくる。

「いいかげん離しやがれ！！！！」

俺が吼えると、手が消え、白い手がこちらに向いいた

『こっちにきて』

手をとると俺の意識は遠のいていく、そしてこの声はどこかで聞いた安心できる声だった

目が覚めると、そこにはとこまでも広がる草原にいた。

『目が覚めたのね』

声がした方へ振り向くと。そこには

「・・母さん？」

母さんが立っていた。

『フォルカ、そんなに私を殺した奴に復讐しないでね』

「そんなの無理だ！なんで母さんを殺した奴に復讐しちゃいけないのんだ！」

『復讐しても、それは新たな復讐を生むだけ』

「でも！」

『それにあなたにはまだ守るものがあるでしょう』

「俺の・・守るもの・・」

俺は父さん、スバル、ギンガが思い浮かんだ。

「そうだね。俺にはまだ守るものがある」

『それに私はまだ死んでいないわ。』

「どういうこと？」

『私はまだあなたの心の中で生きているもの』

そういい母さんはにっこり笑う。

「はは。そうかもな」

俺は立ち上がる

「アレス！、待たせたな」

『まったく、待たせすぎですよ』

「悪いな。セットアップいけるか？」

『もちろんです。』

そうしてセットアップする。いつもの紅い色ではなく、純白に変わり、体の至る所の先端
が紅くなり、髪の色が綺麗な赤に染まっていた。

「この姿は・・・」

『きっと、フォルカの決意に答えた姿なんでしょうね』

「ああ。」

そして母さんの方に振り向く

「母さん俺いくよ」

『ええ。スバル、ギンガ、ゲンヤにもよろしく言っておいてね』

「おう」

そう短くいうと俺の意識が遠のいた。

「ハァハァ・」

一体どれだけの時間殴りあったかわからない。最初はこちらが押していたが疲労の蓄積のより押され始めている。

「おらぁぁぁ！」

ゴガン！！

覇気を纏った拳で殴り、壁に衝突するがよろよろと立ち上がる。

「早く・・・戻ってこいや！！！」

その言葉で左手に赤、右手に青い覇気を球体状に溜め、手を合わせ

「真覇螺旋双波弾！」

それを放つ。赤と青の覇気は螺旋を描くように絡み合い目標に向かっていく。

ドゴォォン！！！

必死に避けようとしたが、回避できずもろにヤツに当たった。

「これでどうだ・・・」

煙で覆われていて見えないが、手ごたえはあった。すると煙の中から白い光があふれ出した。

「なんだ？！」

俺は慌てて構えをとる。そして煙が晴れた

「あれは！」

そこには白い鎧を纏い、髪が赤くなったヤルダバオト、神化したヤルダバオトがたっていた。

「フェルナンド、迷惑をかけたな。」

『オーガもすいませんでした』

「戻るのが遅えんだよ。バカ野郎・・・」

『まったくです・・・』

オレはとても嬉しかった。親友が元に戻ったのもあるが、ゲンヤさ

んとの約束を果たせたことが
一番嬉しかった。

「なぁ」

フォルカは辺りを見渡し、聞いた。

「これ・・・どうするんだ？」

「あ」

そこで俺は気がついた。床にはクレーターができ壁も傷だらけ。そしてここが訓練場だったことに。

そのあと、フォルカと一緒に報告しに行き、元に戻ったのは喜んでくれたが、訓練所の修理代は
問答無用で俺たちが払うことになった。

そして・・・時代はＳＴＲＩＫＥＲＳに移る・・・・

第8話「決意の『神化』」（後書き）

真覇螺旋双波弾はヴァルシオーネのクロスマッシャーだと思ってください。

そしてこれで原作前が一応終了です。

次回は主人公設定です

感想など待ってます

第9話「空港火災と出会い前編」（前書き）

ども～サーシェスです！今回は空港火災とあのキャラたちの出会いです！！

転生者のはずが・・・オリ主っぽくなってる・・・

第9話「空港火災と出会い前編」

第9話「空港火災と出会い前編」

「はぁ～やっと終わった」

「まったくだな」

俺たちは17歳になった。俺の暴走から6年が経ち、俺たちの階級は一等陸尉になった。

「お？そういえば今日、スバルちゃん達来るんだっけか？」

「ああ」

今日はスバルとギンガが会いにくる。俺たちは二人を迎えに車で空港に向かおうとする

ｐｉｐｉｐｉｐｉ・・・不意に携帯がなる

「？もしもし」

『フォルカ。俺だ！』

電話は父さんからだった。しかも慌てている。

「父さん。なんかあった？」

『ああ。スバル達がつく空港で火災が起きてな・・・こっちの人手が全然たりねぇーんだ。
それで、お前らに手伝って欲しいんだが・・・これるか？』

「わかった。すぐ行く！」

『ああ。頼む』

電話が切れる。

「親父さん・・・なんだって？」

「スバルたちのいる空港で火災が起きて、人手が手伝ってくれだってよ」

「マジかよ！なら早く空港に行かないねーと！」

「わかっている。行くぞ」

俺たちは急いで空港に転移した・・・・・

～空港～

俺たちが空港について目に飛び込んで来たのは、炎が空港全体に燃え移り、そして黒い煙
は綺麗な夜空が見えないほど広がっていた。

「「父さん／ゲンヤさん」」

「フォルカ！フェルナンド！来てくれたか！」

父さんを見つけ、今現在の情報を聞いた。大半の人は救助されたがまだスバルとギンガが救助されていないらしい。火災の勢いも増してきているとの事。

「俺が中に行く。お前は消化の方を手伝え！」

「わかった！」

「アレス！」

「オーガ！」

「「セットアップ！！」」

『『了解セットアップ』』

そして、二人はそれぞれの現場へと向かった。

〜？？？〜

私の名前は高町なのは。今日はフェイトちゃん、はやてちゃんと休

暇を過ごそうと思っていた
んだけど、私達に火災救助の応援要請がかかって、現場にいるの。
そして、今はエントランスホールの中を探しているんだけど・・・
「・・・お姉ちゃん・・お父さん・・フォル兄・・助けて・・・・」
声のする方に向かうと、そこに泣いてる女の子を発見した。
「よかった、無事みたいだね。助けに来たよ」
「ふぇ？あ、あの。」
「大丈夫。安全な場所まで一直線だから！」

ミシミシ

「いくよ！レイジング・ハート」
『オーライ、シューティングモード』
わたしはレイジング・ハートを構えようとするが・・・
バキッ！
「え？」
突然目の前の石像がこっちに向かって倒れてくる。プロテクション

は間に合わない！
そう思い、女の子の方へ行き、とっさに庇い、目をつぶる。

って石像が倒れてこない？
わたしは恐る恐る目を開けると・・・
「ふぅ～間に合ったか」
そこには片手で石像を受け止めている、紅い鎧を纏った人がいた。

～フォルカ～
「よっと」
俺は石像を置き、声を掛ける
「大丈夫か？スバルと君」
すると
「フォル兄！！」
スバルが抱きついてくる
「悪いな、遅れて」

スバルの頭をなでていると　白いＢＪを着た人が近づいてくる

「あの～あなたの名「自己紹介はあとだ。スバル離れろ」・・・はい」

俺は言葉を遮るようにして、言う

「俺が道を作るから、お前達はそこを通っていけ。」

「あなたは、どうするんですか？」

「俺はもう一人の妹を助けに行く」

「フォル兄・・・」

スバルが心配そうに言ってくる。

「安心しろ。ギンガは絶対助けるからな」

「うん！」

スバルは笑顔で返事をする・・・・やっぱりスバルには笑顔が似合うな・・・

「きみ、自分達の前にプロテクションを張れ」

「わ、わかりました」

俺はプロテクションを張るのを確認すると、右手に覇気を溜める・・・そして

「貫け！覇龍！」

ドゴォォン！

龍の形の覇気は天井をぶち破り、大きな穴を空ける

「よし、行け！」

「はい！しっかり捕まっててね」

そして彼女たちが外に出るのを見送り、ギンガを探しに向かった・・・

第9話「空港火災と出会い前編」（後書き）

どうでしょうか？

感想、意見どしどし、待ってます。

第9話「空港火災と出会い後編」（前書き）

俊さん。感想と指摘ありがとうございます！
そろそろ、ヒロインアンケートでも取ろうかな・・・
今回はあの人との出会いです。

第９話「空港火災と出会い後編」

第９話「空港火災と出会い後編」

～？？？～

私はフェイト・Ｔ・ハラオウン。私はなのはと休暇を利用して指揮官研修をしていはやてのところに遊びに来ていた。

そして災害救助の要請があったので、私たちも救助に協力することになった。

「こちら通信本部、本局０２応答してください。」

「はい、こちら本局０２テスタロッサ・ハラオウンです。」

「８番ゲート付近に要救助者の反応が出たんですが、局員が進めな

いんです、お願いできますか？」

「８番ゲートですね、バルディッシュ！」

『ルート検索完了。２分以内に到着します。』

そうして私は８番ゲートに向かった。

「管理局です！誰かいませんか！？」

「こ、ここです・・」

そこには小さなバリアを張られた数人の要救助者がいた。

「大丈夫ですか！？すぐに安全な場所までお連れしますね。」

「あ、あの、このバリアを張った魔導師の女の子が妹を探しに行くと言って、あっちの方に・・・・」

「分かりました。皆さんをお送りした後すぐに向かいます。」

～フォルカ～

俺はギンガを探している。

「アレス。付近に何か反応はあるか？」

『この先に微力ながら反応を感じます』

そして、非常階段のような場所についた。

「ギンガ！いるなら返事をしてくれ！！」

「あ、あれ？お兄ちゃん？」

呼びかけると、すぐに返事が返ってきた。

「今、そっちに行くから待ってろよ」

「うん」

ふぅ～無事だったか・・内心ホットして近づこうとするが、ギンガの足元が崩れた。

「キャァァァ！！」

「ちっ！間に合え！」

俺は地面を強く蹴って移動し、ギンガを抱きかかえ、安全な所に着地した。

「ギンガ。怪我はねーか？」

「うん。大丈夫」

よかった。怪我があったら、父さんに何言われるかわかんねーからな。

「なら、これから脱出するからしっかりつかまってろよ」

「うん」

脱出しようとしたが、隣の壁が崩れる。

「っ！誰だ！」

「管理局です！・・・あれ？あなたも誰？」

「自己紹介は後だ・・・この受け答えも本日二回目だな・・・
それより妹を頼む。俺は他に救助者がいないか捜索してくる」

俺はギンガを渡そうとすると、突然まわりの壁が崩れてきた。

～フェイト～

私は数人の要救助者を送り届けた後、バリアを張ったと言う女の子を探していた。

そして一枚の壁を突き抜けた。

ズガァァァァン

「っ！誰だ！」

え、誰かいる！

とりあえず、

「管理局です！・・・あれ？あなたもだれ？」

そこには深紅の鎧を身に付けた人がいた。

「自己紹介は後だ・・・この受け答えも本日二回目だな・・

それより妹を頼む。俺は他に救助者がいないか捜索してくる」

「え？あっ、はい。」

そう言って、女の子を受け取ろうとすると、突然周りの壁が壊れてきた。

「っ！しまった。」

「ちょいと失礼」

突然の事でなにが起こったのかわからなかった。

気がついた時には女の子と一緒に、紅い鎧の人に抱えられていた。

「急だったから、こんな格好で抱えてすまないな」

そう言われて、今の自分の格好に気づいた。私は背中と、膝の下に手を回され

抱きかかえられている、お姫様抱っこで・・・

「いえ、別に私は・・・／／／／」

『本局０２応答願います。』

「はい。こちら本局０２です。何かありましたか？」

不意に通信が入る。

『消化の方で人員が足りないので手伝ってもらいたいのですが・・・』

「わかりまし「その必要はない」っえ？」

鎧の人が割り込んでくる。

『あ、あなたは！？』

「俺の連れがそっちに向かっているからその必要はない」

『了解です！』

通信が切れる。局員の子が慌ててたけど・・・有名な人なのかな？

「あの本当に大丈夫なんですか？」

心配になって聞いてしまった。

「ああ。あいつはやるときはやる奴だからな」

彼はふっ、と笑い、私達を連れ外にでた。

～？？？～

「八神一尉。指定ブロック避難完了です」

「お願いします」

「了解！」

私は八神はやて。陸士部隊で指揮官研修を受けていた私は、前線指揮で作戦に参加して

今は、消化活動を手伝っておる。

「来よ氷結の息吹、アーテム・デス・アイセス！！！！」

私はキューブ型になったものを飛ばし、熱を瞬時に奪ったんやけど・・・

「八神一尉！火の勢いが弱まりません！！」

火の勢いは弱まらんかった。・・・あと少しで援護がくるって言うとったけど・・・
そんな事を考えてると
「すまない。遅くなった」
蒼い鎧を纏った人がおった。

～フェルナンド～

援護にきたものの、火の勢いが弱まっていなかった。広域魔法を使った後があるが
あまり効果がなかったようだ・・・それなら、あれを使うか・・・・
「全局員に告ぐ、これから使う物に巻き込まれたくなかったらここから離れろ！！」
最初は俺の姿を見て局員が驚いていたが、すぐに離れてくれた。
「いくぜ！氷華絢爛覇（ひょうかけんらんは）！！」
すると、吹雪がおき、燃え広がる火を一瞬にして凍らせ、そして
「ほい」
凍った炎を指で突くと
パキィィィン！

凍った火が一瞬にして砕けた。俺は振り返り

「まだ完全に消えてないところがあるかも知れないから
ここはよろしく～」

と言い残し移動した。

～はやて～

すごい。その一言しか思いつかへんかった。一瞬で
凍らすなんて・・・・そう思っとると局員達が騒ぎ出す。

「あれが・・・『蒼き鬼神』」

「俺初めて本物見ましたよ！」

「ああ俺もだ」

蒼き鬼神？全然聞いたことあらへんな・・・・ちょと聞いてみよ

「なぁ、蒼き鬼神ってなんなん？」

聞くと局員達は驚いた顔をしていた

「八神一尉、蒼き鬼神を知らないんですか！？」

「ま、まぁ」

そんなにすごい人たちなんかな？

「蒼き鬼神は地上本部のエースオブエースとも言われ、蒼き鬼神には紅き戦神って呼ばれている
パートナーがいて二人は『蒼紅の守護神』て呼ばれるほどの有名人なんですよ！！」

「そういえば、あの人たちが来てから、地上の犯罪率が２０％まで落ちたって聞いたぞ」

２０％！？すごすぎるやん！それにしても蒼き鬼神と紅き戦神か・・・

「もう一回ちゃんと会ってみたいな・・・・」

この後そう遅くない未来に二人と会うことを・・・・

第9話「空港火災と出会い後編」（後書き）

空港火災篇はこれで終わりです。
深夜に書いたので何か間違いがあると思います。そこは指摘してください
次ぎあたりに六課に入れる思います。
そしてヒロインアンケートも取らないと！！
感想など待ってマース。それでは（，－。－）。ｏ〇オヤスミ

第１０話「機動六課出向前日」（前書き）

原作突入！

今回は六課に行く直前ぐらいまでです
それとフォルカの性格を少し変えようかと思います。

第１０話「機動六課出向前日」

第１０話「機動六課出向前日」

～フォルカ～

「「異動だぁ！？」」

俺とフェルナンドは父さんに呼び出され部隊長室に来たんだが、入って早々に異動と言われた。

「父さん、俺らなんかミスったか？」

そう。異動したりするのは、大方何か問題を起こした者に言われる命令で、
１０８でもそんな奴が何人かいたためそう思うほかなかった。

「全然違うぞ。むしろお前達には色々やってもらってるしな。」

「じゃあ、なんで」

「その話はレジアス中将がしてくれると思うから、今から地上本部に行って来い」

「「了解」」

俺たちは部隊長室を出て、足早に地上本部へ向かった。

「久しぶりだな。二人とも」

「はい。お久しぶりです、おやっさん」

「久しぶりだね～とっつぁん」

と軽く挨拶をすます3人

上司であるレジアス中将をこのように呼べるのは、この二人だけだろう。

「おやっさん、俺たち異動するって聞いたけど・・・・どこに？」

「二人に異動してもらいたいのは、ここだ」

そういい、二人に資料をみせる

「機動・・・六課？」

「ああ。最近できた隊だ」

「なんでこんなとこに？とっつぁんはあまり反対してないはずじゃ・・・」

「反対はしてないが探ってみると色々裏があってな」

そしてある資料を見せた

「なにこの部隊のメンバー！？
高町なのは、フェイト・Ｔ・ハラオウン、と八神はやてって、この時点で
魔導師ランクオーバーＳＳじゃん！他にもヴォルケンリッターも一人一人がＳランク・・・
一部隊なのに戦力保持しすぎだろ・・・」

「その辺も裏があるんだろうな・・・・それともうひとつ」

「なんですか？」

「『計画』が最終段階に入った」

「「！？」」

「それじゃあ、あとは時が来るのを待つだけ・・・」

「そうだ」

これで話が終わりその後は世間話をした。

「それではいつ俺たちは、六課に向かえばいいですか」

「明日だ」

「わかりました。では、陸士１０８部隊フォルカ・ナカジマ一佐」

「同じく、フェルナンド・アルドゥク一佐」

「「明日より、機動六課に出向します」」

といい、二人そろって敬礼した

「ああ。頼む。それと・・・もしアイツ《・・・》に会ったらよろしく言っといてくれ」

「はい。それと時間があればみんなで飲みに行きましょうね」

「ああ」

「それでは失礼しました」

「失礼しました」

そして、部屋を出た。

その後、１０８に戻り荷物を纏めるとすぐに寝た。

第１０話「機動六課出向前日」（後書き）

雑ですね・・・
僕の所のレジアスは綺麗です。
それとヒロインはハーレムと言う形に決めました
ハーレムについての事、感想など待ってます。

第１１話「出向！機動六課」（前書き）

今日やっとｖｉｖｉｄｏとｆｄｒｃｅの４巻買う事ができた。

それとキャラ設定を新しく書きます。

第１１話「出向！機動六課」

第１１話「出向！機動六課」

～フォルカ～

「ここが機動六課か・・・」

「なにこのでかさ、金の使いすぎじゃね？」

六課の隊舎を見上げ言う俺と、どうでもいいことを言っているフェルナンド。

「そんなバカ事どうでもいいから、早く部隊長室行くぞ」

『まったくです』

そういう俺とアレス

「ねぇ！なんか俺冷たくない！？そう思わないか、オーガ？」

『はい・・・』

「そうだ『本当にどうでもいいですね』ってちょっとオーガさん！？」

と二人？で漫才を始める。・・・呆れた俺は

「置いてくぞ」
短く言って、隊舎の方へ進む。
「おい！ちょっとまてや！」
といい、追いかけてくる
そして、部隊長室に向かった。

～はやて～

「「異動？」」

「そうや」

ども～機動六課部隊長の八神はやてです。今は部隊長室で
なのはちゃんとフェイトちゃんとこれから異動してくる隊員の話を
しているんや。

「どんな人達が来るの？はやてちゃん？」

首を傾げ聞いてくるなのはちゃん。

「え～とな、それは秘密や」

「どうして？」

次はフェイトちゃんが聞いてくる

「内緒で。ヒントを言うなら、私達はこれから来る二人に会った事があるんや」

「え！そうなの！？」

「そうやで。私も顔は知らんけど」

「早く来ないかな？」

そわそわしているフェイトちゃん。

そこに　コンコン

「はい」

「本日出向してきたものですが」

「ええタイミングやん。入ってきてええで」

「「失礼します」」

扉が開き、中に入ってくる。

入ってきたのは赤い髪の青年と緑の髪の青年やった。

～フォルカ～

「本日、機動六課に出向しました、フォルカ・ナカジマ一佐」

「同じく、フェルナンド・アルドゥク一佐」

「「これからよろしくお願いします」」

「私は部隊長を勤めさせてもらっています、八神はやてです。でこっちが」

「高町なのは一等空尉です」

「フェイト・T・ハラオウン執務官です」

「「「よろしくおねがいします」」」

ふぅ～挨拶も無事終わったな～

「さっそくなんですけど、ナカジマ一佐とアルドゥク一佐に質問してもよろしいでしょうか？」

「それは別にいいんだが、俺達は固っくるしい態度は苦手だから普通でいいぞ。
それと名前で呼んでくれ。後ろの二人も名前でいいぞ」

「わかりました。ほなこっちも名前でかまわへんよ。ええよな？
なのはちゃん、フェイトちゃん」

「「うん」」

「わかった。それじゃあ、改めてよろしくな。なのは、フェイト、はやて。」

「なのは、フェイト、はやて。これからよろしく。」

俺とフェルナンドが言う

「「「こちらこそよろしくお願いします。フォルカさん、フェルナンドさん」」」

三人がハモッて言う。・・・・息ぴったりだな

「それで質問ってのはなんなんだ？はやて？」

とフェルナンドが聞く

「うん、改めて聞くんやけど４年前の空港火災で助けてくれたんは、フォルカさんとフェルナンドさんなんか？」

「ああ、そうだ。まぁ、はやての所にいったのはフェルナンドだけどな」

「へぇ～そうなんか～ありがとうな。フェルナンドさん」

「気にすんな。俺もできる事しただけだし」

「あれ？ってことは私とフェイトちゃんを助けてくれたのは・・・」

と気づいたなのは

「ああ、俺だ。それとフェイトすまなかったな。あんな運びかたして」

「え！あ、気にしないで。・・・・・・どっちかというと嬉しかったから／／／／／」

「そ、そうか／／」

「（なんか、いらいらするの・・・）」

フェイトは気づいていないんだろうか？俺には小声が聞こえてしまい、恥ずかしい

フェルナンドとはやてにも聞こえたようでニヤニヤしている。

・・・そしてなのはからは黒いオーラが漏れている。

「今からホールに行くから、ついて来てな。」

そうして男二人は3人の花と共にホールへ向かった・・・

余談だが、ニヤニヤしていたフェルナンドはフォルカに叩かれた

第１１話「出向！機動六課」（後書き）

キャラの口調が難しい

キャラ設定（前書き）

もう一回書きます。

そして前回のを消します

少し変わっただけで、他はあまりかわっていません。

裏モードを変更しました

キャラ設定

名前　フォルカ・ナカジマ　　階級一佐

年齢　２１歳

身長　１８６ｃｍ

体重　７０ｋｇ

容姿　フォルカ・アルバークそのもの

性格　　普段はやさしいが怒ると相当怖い。面倒見がよく子供、動物などには好かれる。

仲間を傷つけたりした場合アレスの裏モードが発動し（羅刹機アルクオンになり）ＳＥ★Ｉ★ＳＡ★？（なのはでいうＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩ）される。

二つ名　『紅き戦神』、『白銀の聖神』、『漆黒の羅刹』　など

レアスキル　覇気（ＥＸランク）覇気変換資　爆炎

備考　神様に殺され転生した中学3年生。原作はＡＳぐらいしか覚えていない。
そのため原作ブレイクを自然にしている（たまに）使う技はヤルダバオトの技とオリ技

今までフォルカが使った、オリ技（増えたら更新します）

機神爆砕撃　　元ネタは電童の『爆砕重落下』

デバイス紹介

名前　アレス

待機状態　紅い宝石がついた白いバングル

セットアップ時　まんまヤルダバオトと裏モードの羅刹機アルクオン

備考　女性ＡＩでマスター思いのデバイスで互いが信頼しているので名前で呼び合っている。
神化は使えるが、裏モードは使えない（あれは憎しみが強いときのみ）

アルクオン時の技は

羅刹連拳、羅刹幻殺甲、羅刹剛鉄甲、羅刹覇龍吼、羅刹断撃拳

サ：次はフェルナンド

名前　フェルナンド・アルドゥク　　階級　一佐

身長　１８７ｃｍ

体重　７５ｋｇ

容姿　フェルナンド・アルドゥクそのまま

性格　普段はおちゃらけているが、仕事中はあまりふざけない。ようはやるときはやる男。

レアスキル　覇気（ＥＸランク）　覇気変換資質　氷結

二つ名　『蒼き鬼神』、『蒼光の邪神』など

備考　六課内ではほぼふざけている。
フォルカとは前世の親友で同じく転生者でフォルカと同じく原作知識はＡＳまでしかない。
こっちも自然に原作ブレイクをたまにする。使う技はビレフォールの技と、オリ技。

フェルナンドが使ったオリ技（増えたら更新します）

機神三連撃　　元ネタは電童の『疾風三連撃』

真覇螺旋双波弾　　元ネタはヴァルシオーネの『クロスマッシャー』

氷華絢爛覇　　元ネタペイリネスの『秘儀氷華絢爛覇』

デバイス紹介

名前オーガ

待機状態　蒼い宝石のついた黒いバングル

セットアップ時　ビレフォールと神化形態

備考　アレスと同じ女性ＡＩ。
冗談などもいうが、真面目でフェルナンドのことは名前で呼んでいる。

第１２話「挨拶はいいけど・・・俺たち見学じゃないの？」（前書き）

題名が全然思いつかない・・・

第１２話「挨拶はいいけど・・・俺たち見学じゃないの？」

第１２話「挨拶はいいけど・・・俺たち見学じゃないの？」

～スバル～

急に召集を受けた、私達フォワードと機動六課の職員がホールに集まった。

「ねぇーティアどうしたんだろうね？」

「あたしにわかるわけないでしょ」

「なにかあったんでしょうか？」

「みなさん、部隊長たちが来ましたよ」

エリオに言われ壇上に目を向ける。

そこには八神部隊長となのは隊長、フェイト隊長と見知った顔の、男性が２人いた。

「え」

その姿をみて私とティアは固まってしまった。なぜなら・・・

「本日機動六課に異動してきた、フォルカ・ナカジマ一佐です」

そこには私が大好きな兄と、

「同じく異動してきた、フェルナンド・アルドゥク一佐です」

その親友がいたから。

～フォルカ～

「ふぅ～疲れたな」

「まったくだな」

無事挨拶が終わったのはいいが、その後に俺たちの二つ名がばれた途端

歓声をあげ、周りに集まってサインやら求められた。

タッタッタ

誰かが後ろから、走ってくる・・・大体予想はできてるがな

「フォル兄ーーー！！」

ドスッ　とスバルに後ろから抱きつかれる

「よぉスバル元気だったか？」

と頭を撫でながら聞くと、

「えへへ、元気だったよ」

嬉しそうな顔をして答える・・・

後ろのほうから『いいな・・・』、『羨ましいの・・』とか聞こえたけど、無視無視。

「フェル兄も元気だった？」

「おう」

フェルナンドを見つけ、挨拶したスバルだが、

「このバカスバル！」

後ろから来たティアナに叩かれる。

ティアナの後ろには赤とピンクの髪の子供2人と龍（小さくない？）がいた

「久しぶりだな。ティアナ」

「はい！お久しぶりです。フォルカさん、フェルナンドさん」

「ああ。それとティアナ、後ろのちびっ子の名前はなんて言うんだ？」

「失礼しました！僕はエリオ・モンディアル三等陸士です」

「私は、キャロ・ル・ルシエ三等陸士です。この子はフリードって言います」

「くきゅ～」

「へ～エリオとキャロにフリードっていうのか」

「「はい！よろしくお願いします！」」

「そんな畏まらなくてもいいぞ」

「そうだな。それと呼ぶときは普通に名前で呼んでくれ」

「「はい！」」

その後、フォワードと喋っていると・・・

「自己紹介は終わったかな？」

「あっ！なのはさん」

なのはが来て、フォワードはピシっと敬礼をしていた。

その姿を苦笑いして見た後、

「これから、フォワードの訓練があるんだけど、見に来る？」

「見に行ってもいいのか？」

「うん。アドバイスとかしてくれると嬉しいかな」

「別に俺はいいぞ。おまえは？」

「もちろんいくぜ！」

「だとよ」

「うん。それじゃあ、みんなでいこっか」

「「「「はい」」」」

そして訓練所に着くまで話をした・・・

～訓練所～

訓練所に着くと、眼鏡をかけた女性がいた

「シャーリー」

「あ、なのはさん。来たんですか？」

「今来たところだよ。」

「そちらのお二人は？」

「新しく配属されたフォルカ・ナカジマ一佐とフェルナンド・アルドゥク一佐だよ」

「フォルカ・ナカジマ一佐だ。名前で呼んでくれてかまわない」

「フェルナンド・アルドゥク一佐だ。こっちも名前で呼んでくれ」

「はい。シャリオ・フィニーノ通信士及びデバイスの制作・整備の主任です。」

「それじゃあ、訓練を始める前に、フォルカさんとフェルナンドさんにも体験してもらおっか」

・・・思考停止

「「・・・は？」」

「いや～お二人に手本を見せてもらいたくって」

「俺達は訓練じゃなくて、見学なはずだけどなんで変わってんの？」

「フォワードも見たがってるし、・・・ね」

「「「「おねがいします！」」」」

俺達の周り全員が「見たい」という眼差しで見ていた。

「はぁ～わかったよ。フェルナンドもいいか？」

「どうせ、逃げ場がないんだ。やるっきゃねぇだろ」

「それじゃあ、はやてちゃんとフェイトちゃんもくるから少しまっててね」

数分後

「待たせて、ごめんな～なのはちゃん」

「ごめん、なのは遅れて。」

「あっ、はやてちゃん、フェイトちゃん」

「なのは、じゃあ始めていいのか？」

今の俺とフェルナンドの服装は六課の訓練着を着ている（上は黒のタンクトップ）

「うん。じゃあガジェットはどれくらいがいい？」

「そうだな・・・・二人合わせて２０機ぐらいだな」

「わかったのじゃ」「その前に俺のデバイス預かってくれ」ふぇ？」

「あ、じゃあ俺のも頼む」

俺とフェルナンドはなのはにデバイスを渡す。

「あれ？二人はデバイス使わんのか？」

疑問に思ったはやてが聞いてくる

「久々に暴れたいからな」

というフェルナンド。

「じゃあ準備はいい？」

「「ああ」」

「スタート！」

となのはの合図と共に駆け出し、すでにそれぞれが5機ずつ壊していた

〜フォルカ・フェルナンド〜

「スタート！」

の合図で一瞬で距離を詰める

フォルカは近くにいたガジェットを覇気を纏わせた拳で叩き壊し、その残骸をガジェットに投げて爆発させ、2機を壊す。
投げた右腕を基点とし、左の回し蹴りで、2機を壊した。

フェルナンドは最初の一体に覇気を纏わせた足で踵落としを決め破壊。
すばやく着地して、後ろにいたガジェットに裏拳を入れ破壊。
そして建物を足場にジャンプし、右足を出し落ちてきた3体のガジェットを貫き破壊する。

「「ふぅ」」

と息を吐く

「「「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え？」」」
」」」

あまりの一瞬のことで理解できないはやてたち

「シャ、シャーリー、あの二人は何秒間で何機破壊したん？」

「え～と、5秒間に5機を破壊しました」

「「「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」」」
」」

その時間に黙ってしまうはやてたち

「後半分か・・・ん？」

「どうした？」

「いや、はやてたちが固まっているんだけど・・・」

「おっ、ほんとだ。おーいみんなどうしたんだ？」

「「「「「「・・・・・・・・・・・・ですか？」」」」」」」

「「ん？」」

「「「「「「今のは一体なんなんですかーーーーーーー！！」」」

」」」」

「え？なにって、ただ殴って蹴って壊しただけだけど・・なぁ？」

「確かにそれだけだぞ？」

「「「「「「「詳しく説明してください！」」」」」」」

「「え、やだ」」

「「「「「「しかも、即答！？」」」」」」

「「だって・・・」」

「「「「「「だって・・・？」」」」」」

「「めんどくさいじゃん（ー、ー´）キリッ」」

「「「「「「ちゃんと説明しろ！！」」」」」」

第１２話「挨拶はいいけど・・・俺たち見学じゃないの？」（後書き）

ぐだぐだです。

感想などまってます

第１３話「説明、新デバイス、そしてファーストアラート」（前書き）

完成ＤＡ！

今日はいつもより早く書けました。

それでは・・・・どうぞ

第１３話「説明、新デバイス、そしてファーストアラート」

第１３話「説明、新デバイス、そしてファーストアラート」

～フォルカ～

説明しだのうるさいのを黙らせ、残った１０機を二人で壊した。
なんで描写ないのか？
それはさっきと同じ様な事をしただけだから（本当は作者が放り投げたからｗ）

「「「「・・・・・・・」」」」

そしてさっきから「早く説明してください！」みたいなフォワードと

「（なぁ、説明したほうがいいのか？）」

「（たぶんな。そうじゃねぇと隊長たちに殺される・・・）」

そう念話で喋り、隊長たちの方に視線を向ける。

「「「「・・・・・」」」」

その視線は「説明しないとＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩだよ♪」という目でこちらを見ていた

「・・・質問は？」

俺は覚悟を決め、みんなに聞く・・・

「さっきはなにやったんですか！」

「かっこいいです！教えてください！」

「どんな魔法を使ったの！」

「詳しく教えてや！」

やっぱり、一片に来た。わかってたけど・・・。

「じゃあ答える前に言っておく、俺たちそもそもリンカーコアないから」

「「「「「はぁ！？」」」」」

「シャーリーに聞いてみろ」

「シャーリー、ほんまか？」

「はい。何回も調べたんですが、反応がないんです。
その代りに何かオーラみたいなものが体から出ているんです・・・
これは何なんですか？」

「ああ。それは俺たちのレアスキルで『覇気』って言うんだ」

「この覇気っていったいなんなん？」

「覇気ってのは・・・・・・（説明中）・・・・・・・・みたいな物だ」

「それじゃあ、二人のデバイスも覇気で起動してるの？」

「そうだ。アレス！」

『はい。私の名前はアレスといいます。これからよろしくお願いします』

「ん～じゃ俺たちもした方がいいな。オーガ！」

『はいはい。私はオーガといいます。
それとフェルナンドはバカなので、フォローしてくれると助かります』

「おい！俺のどこがバカなんだ！！」

「どこって・・・」

『それは・・・』

「『全部w』」

「即答すんなー！」

「「「「ハハハ」」」」

それを見て笑うフォワード達。

「はやて。そろそろ・・・」

「あ、もうこんな時間なんか」

「どこかに行くのか？」

とフェルナンドが聞いた。

「これから聖王教会にいくんや」

「聖王教会か・・・俺、あそこ嫌いなんだよ」

「俺も、嫌いだ」

俺はどこぞのエクソシストの口調でいい、フェルナンドもその言葉に同意した。

「二人とも、聖王教会となんかあったんか？」

「まぁ・・・色々とな」

「ふぅ～ん、そうなんか。それじゃあフェイトちゃんいくで。」

「わかった。私も行って来るね」

「「「「いってらっしゃい！八神部隊長、フェイト隊長」」」」

ピシッと敬礼を決める。・・・・はやてとフェイトは苦笑いをしながら訓練所を出て行った。

「それじゃあ、フォワードはこれから訓練始めるからね」

「「「「え」」」」

これから訓練とか・・・・ドンマイ。

訓練はアニメと同じなので飛ばしデバイスルームから話を始めます。

追伸、エリオの食欲に度肝を抜かされましたw

それでは

キングクリムゾン！！

～デバイスルーム

FW陣＋俺たちは今、デバイスルームにいる。理由はもちろん新デ

バイスを貰う為だ。

「これが私達の新デバイス、ですか？」

スバルとティアナの前に、宝石のような物と、カードのような物が浮いている。

「そうでーす」

後ろに居るシャーリーが元気良く答える。そして設計者や、協力者の名前を言う。その声も元気だった。どうやらデバイスが完成してテンションが高い。

「ストラーダとケリュケイオンは、変化なしかな？」

「うん、そうなのかな？」

エリオとキャロの前には、前と変わらない姿のデバイスがあった。確かに見ただけでは何も変わってなかった。しかし、その意見に反対する声が上がる。

「違いま～す」

リィンが上から現れ、エリオ達に見える位置まで降りた。そして、リィンは二人にデバイスの変化点を言う。なんでも今までのは最低限のフレームと機能だけだったようだ。今まででも十分の力を発揮していたデバイス達を思い出して、二人は驚いた。

そして、リィンが全体のデバイスについての説明・・・というより助言をする。

「この子たちはまだみんな生まれたばかりですが、いろんな人の思いや願いが込められれて、いっぱい時間をかけてやっと完成したです」

それぞれのデバイスをそれぞれの持ち主の元へ優しく渡す。

「ただの道具や武器と思わないで大切に・・・だけど、性能の限界まで思いっきり使ってあげて欲しいです」

それを聞いてフォワードはデバイスを大切に握りしめた。

「ごめんごめんお待たせ」

リィンの話が終わった直後に、なのはが部屋に入って来た。それから連絡事項を話す

「まずその子達みんな、何段階にも分けて出力リミッターをかけているのね」

なので一番最初の段階だと性能が上がってもそんなに変わらないらしい

「で、確実に今の出力を扱えるようになったら、私やフェイト隊長、リィンやシャーリーの判断で解除してくから」

「ちょうど一緒にレベルアップしてく感じですね」

三人がリミッターの説明をしていく。

「出力リミッターっていうと、なのはさん達にも掛かってますよね

？」

「私達はデバイスだけじゃなくて、本人にもだけどね」

なのはの言葉に驚くFW陣。そこで、なのはが気づく

「フォルカさんとフェルナンドさんは、覇気を魔力ランクに変換すると何ランクなの？」

なのはの言葉にそういえばみたいな顔をする。あまりいいたくないんだよなぁ〜

「「計測不能」」

「はい？」

「だから、計測不能」

沈黙。そして・・・・

「「「「え〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜！！！」」」」

声を揃えて、驚く。言いたくないのは、この反応が嫌だから。

「それじゃあ、リミッターは掛かってるんですか？」

「あっそれはな・・・・」

話そうと思ったが・・・

ウーウーウーウー

突然アラートがなった。このアラートの正体を皆知っていた。

「一級警戒体制！？」

「グリフィス君」

なのはが呼んだ瞬間モニターが表れる。

「教会の方から出動命令です」

「なのは隊長フェイト隊長グリフィス君、こちらはやて」

返事をし、状況を聞く隊長二人。

「レリックらしき物が見つかったんよ。対象は、山岳リニアレールで移動中。内部に侵入したガジェットのせいで車両の制御が奪われてる。リニアレール内のガジェットは、最低でも三十体。未確認タイプも出てるかもしれん。いきなりハードな初出動や、なのはちゃんフェイトちゃんいけるか？フォルカさん、フェルナンドさんもいってくれるか？」

はやてが状況説明をし、二人に聞く。二人は「大丈夫」と答え、俺たちは頷き答える。

「スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、みんなもＯＫか？」

「「はい」」

声を揃え返事をする。

はやてが、それぞれに指揮権を与え、現場の指揮はなのはとフェイト、はやてが戻るまでの間のロングアーチの指揮はグリフィス、フォワードの護衛を俺とフェルナンドに頼んだ。

「それじゃあ、機動六課ＦＷ部隊出動」

「「はい／了解」」

こうして、機動六課の初任務が始まった。

この時は気づかなかった、ガジェットとは違う新たな敵が近づいていることに・・・・

第13話「説明、新デバイス、そしてファーストアラート」（後書き）

長かった・・・・

次回、新たな敵登場！！

感想など待ってマース！

第１４話「ファースト・アラート、新たな敵」（前書き）

新たな敵登場！！

ゆっくりみていってね

第１４話「ファースト・アラート、新たな敵」

第１４話「ファースト・アラート、新たな敵」

〜？？？〜

「機動六課が出撃した」

「あの部隊か・・・・ただでさえ、奴らがあやしい動きをし始めているというのに・・・・」

「ならあの隊にはここで消えてもらう。

・・・これ以上邪魔をされると計画が崩れる・・・・おいアレ《・・・》を出せ」

「わかりました」

するとそこにいた何かが転送された。

〜司令室〜

「問題の貨物車両速度７０を維持、已然進行中です」

「重要貨物室の突破は、まだされていないようですが……」

「時間の問題か……」

「！！　アルト、ルキノ、広域スキャン。サーチャーを空へ！！」

サーチャーを空にかけてみると、大量のガジェット反応があり、その数に驚いた。

「ガジェット反応！！　空から！！」

「航空型、現地観測隊を補足！！」

〜フェイト〜

「こちらフェイト、グリフィス。こちらは現在パーキングの到着。車を止めて現場に向かうから、飛行許可をお願い……」

「了解、市街地都市飛行。承認します」

パーキングに止め、車から降りた私は、バルディッシュを取り出し、セットアップの準備をした。

《ゲットセット》

「うん……バルディッシュ・アサルト……セットアップ！！」

《セットアップ》

「ライトニング1、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン。行きます！！」

バリアジャケットを装着した私は、飛行魔法で全速力で現場に向かった。

～フォルカ～

「ヴァイス君、私も出るよ。フェイト隊長と二人で空を押さえる！

！」

「ウッス、なのはさんお願いします！！」

「じゃ、ちょっと出てくるけど、みんなも頑張ってズバッとやっつけちゃおう」

「「「「はい！！」」」」

「……ん？」

フォワード陣は気合い入っていたが、一人だけキャロが下をうつむいていた。

「キャロ、大丈夫か……」

「は、はい！！　大丈夫です」

俺にはとてもそうは見えない状態だ。
自分の力を怖がっているような感じがする・・・

「……キャロ、自分の力が怖いか」

「はい・・・・」

「キャロ、怖いのはしょうがないかもしれない。

誰もが最初の任務は怖いと思うさ。
だがな、お前は一人じゃない
フォワードのみんなや、俺や、フェルナンド、なのは、フェイトがいる。
もっとみんなを頼れ。わかったか？」

「はい！」

「いい返事だ」

ナデナデ

「はぅ～／／」

頭を撫でると気持ちよさそうにする

「なのはさん！前方からガジェットが接近中です！」

「わかりました！！」

《メインハッチオープン》

なのはは、出撃する前にこちらに来る

「フォルカさん、フェルナンドさん、フォワード達をよろしくお願いします」

と告げる。もちろん俺たちは・・・

「「わかった／まかせろ」」

それを聞いて安心したなのはは、先陣を切ってヘリから飛び降り、レイジングハートを起動させた。

《スタンバイレディ》

「レイジングハート・エクセリオン……セットアップ！！」

《セットアップ》

「スターズ1、高町なのは。行きます！！」

バリアジャケットを装着したなのは、アクセルフィンを展開し高速飛行をしガジェット達を殲滅に向かった。

なのはが出陣した後、ヘリ内でリインが今回のミッションの説明をしていた。

「任務は二つ。ガジェット達を逃走させず、全機破壊すること。そして、レリックを安全に確保すること。ですから……」

「スターズのティアナとスバル、ライトニングの二人とフィルの分隊に分かれて、ガジェットを破壊しながら、車両前後から中央に向

かうです」

「レリックはここ。7両目の重要貨物室。スターズかライトニングのどちらか先に付いた方が、レリックを確保するですよ」

「俺とフェルナンドが守ってやるから思い切りやってこい」

「私も現場に降りて、管制を担当するです」

「「「「「はいっ！！」」」」」

〜なのは〜

「スターズ1、ライトニング1、エンゲージ！！」

「こっちの空域は二人で抑える。新人達の方フォローお願い……」

「了解」

「同じ空は久しぶりだね、フェイトちゃん……」

「うん、なのは……」

こっちの動きに気付いたのか、ガジェットの大群がこっちに向かってきていた。

《アクセルシューター》

《ハーケンセイバー》

私達はそれぞれ迎撃し、空域静圧を行っていた。

「さーて新人ども、隊長さん達が空を押さえてくれているおかげで、安全無事に降下ポイントに到着だ。……準備は良いか！！」

「「「「「はい！！」」」」」

俺たちはまず、スターズの二人から降下をし、その後エリオとキャロ、そして俺達が最後に降下することになった。

「スターズ3、スバル・ナカジマ」

「スターズ4、ティアナ・ランスター」

「「行きます！！」」

「……いくよ、マッハキャリバー」

「……お願いね、クロスミラージュ」

「「セットアップ！！」」

《《スタンバイレディ》》

バリアジャケットを装着したティアナ達は、浮遊魔法を使ってリニアレールの最前車両に着地した。

「次、ライトニング！……チビども気いつけてな」

「「はい！！」」

キャロが怖がっているのを見たエリオが手を差し出す

「キャロ、一緒に降りようか……」

「……うん！！」

「ライトニング3、エリオ・モンディアル」

「ライトニング4、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ」

「「行きます！！」」

「ストラーダ」

「ケリュケイオン」

「「セットアップ！！」」

同じようにバリアジャケットを装着し、リニアレールの最後尾に着地した。

俺達も降下を始めようとしたその時・・・

「お二人とも・・・」

「どうした、ヴァイス？」

「……あいつらのこと……頼みます……」

「わかってるさ！」

「合点だ！」

そういった後、ヘリから飛び降りる。

「久しぶりの戦闘だ。行くぞアレス！」

《任せてください！！》

「こっちも暴れるぞ。オーガ」

《おまかせください！！》

俺達はバリアジャケットを装着し、みんなの後ろに着地する。

「それがフォル兄とフェル兄のＢＪ」

「かっこいいです！！」

「スバル、エリオ感想は後だ！！」

スバル達の前に車両内から、ガジェットがビームを放ってきた。何機か屋根を突き破って、出てきそうな状態であった。

《《ドライバーイグニッション》》

それぞれのデバイスを起動させ、ティアナはクロスミラージュを、出てこようとするガジェットに向けていた。

《ヴァリアブルバレット》

「シュート！！」

ティアナの放ったヴァリアブルバレットは、ＡＭＦを突き抜けてガ

ジェットに命中し破壊した。

「うぉぉぉぉぉ」

スバルもガジェットが開けた穴から突入し、リボルバーナックルで一体のガジェットを破壊した。
その後、マッハキャリバーで内部を進んでいったが、リボルバーシュートでガジェットを破壊した時、屋根も破壊してしまい、その勢いでスバルも外に放り出されてしまった。

「う、うわぁぁぁぁ」

《ウイングロード》

マッハキャリバーがウイングロードを発動し、スバルは何とか別の車両の屋根に着地することが出来た。

「……うわぁ……マッハキャリバー、お前って、もしかしてかなり凄い……」

「加速とか、グリップコントロールとか……それにウイングロードまで……」

《私はあなたをより強く、より速く、走らせる為に作り出されましたから》

「……うん！！　でも、マッハキャリバーはＡＩとはいえ心があるんでしょう。だったら、ちょっと言い換えよう。……お前はね、あたしと一緒に走る為に生まれてきたんだよ」

《同じ意味に感じます》

「違うんだよ、いろいろと……」

《考えておきます》

「うん！！」

その頃、内部に突入していたティア達は、ケーブルを破壊してレールを止めようとしたが……

「ティアナはどうです」

「駄目です。ケーブルの破壊、効果なし」

「了解、車両の停止は私は引き受けるです。ティアナはスバルと合流してください」

「了解！！」

《ワンハンドモード》

あたしはクロスミラージュを二丁から一丁にし、スバルと合流する為に中央部に向かった。

「しかし、さすが最新型。色々便利だし、弾体生成までサポートしてくれるんだね」

《はい、不要でしたか》

「あんたみたいに優秀な子に頼りすぎると、あたし的にはよくないんだけど……でも、実戦では助かるよ」

《サンキュー》

『スターズF、４両目で合流。ライトニングFとスターズ5、１０両目で戦闘中』

「スターズ1、ライトニング1、制空権獲得」

「ガジェット?型、散開開始。追撃サポートに回ります」

「ごめんな、おまたせ」

聖王教会から八神部隊長が戻ってきて、ロングアーチスタッフが全員そろった。

「八神部隊長！！」

「おかえりなさい」

「ここまでは、比較的順調です」

「うん……」

「ライトニングF、スターズ5、8両目に突入……エンカウント、新型です！！」

ここまで書いてなんですが丸くてでかい奴との戦闘はいくら考えてもアニメと同じなのではしょります

その頃俺たちはフォワードの打ち漏らしたガジェットなどを破壊していた。

「ぜらぁぁ！」

俺は最後の一体に回し蹴りを放ちガジェットを破壊する。

「こんなもんか・・・・」

「ああ。そうだな」

フォワードの活躍によりレリックを封印することができた。

「それじゃあ、戻るか」

「おう」

俺とフェルナンドがみんなの下に移動しようとした。その時・・・・

「前方の森の中に転移反応！アンノウンが出現その数３０！」

一気に緊張が走り、みなが一斉に森のほうを向く。するとそこには・・・

「何なの・・・アレ」

誰かの呟きが聞こえる。・・・・だが俺たちはそれを知っていた。

そこには全身が骨のようなものでで き、鋭利な黄色い爪が生え、背中からあばら骨のようなものが飛び出ている姿が特徴のアインストクノッヘンと体が触手のでできいて鎧で覆われている植物のような姿が特徴のアインストグリート

「おいおい。うそだろ・・・」

フェルナンドはその姿をみて俺のほうを向く。

こいつらはスーパーロボット大戦に出てくる敵で、この世界にはいない存在だ。

だが、俺にはそんなのどうでもよかった。

俺はこいつらを見た途端、ある感情が生まれる。それは・・・・憤怒

昔に振り払った感情がでてくる。

「おまえらが・・」

俺がこいつらに憎悪の感情を持つ理由それは・・・・

「おまえらが母さん達の部隊を襲ったのか

!!」

そう。目の前にいるこいつらが、目の前にいるこいつらこそが

・・・

母さん達の部隊を襲った、本当の犯人だった・・・

第１４話「ファースト・アラート、新たな敵」（後書き）

どうでしょうか。

憎悪が復活しますが一時的だと思います

感想など待ってマース！！

第１５話「『究極ゲシュペンストキィィィック！』え？一回使って即封印！？」

投稿が遅れました。

すいません。更新が遅れました

それと長いです。

キャラ設定をいじりました。よかったら見てください

第15話「『究極ゲシュペンストキィィィック！』え？一回使って即封印！？」

第15話「『究極ゲシュペンストキィィィック！』え？一回使って即封印！？」

～スバル～

『おまえらが母さん達の部隊を襲ったのか！！』

「え？」

アンノウンが現れた後に言ったフォル兄の言葉に、私は耳を疑った。

「あれが・・・お母さんを殺した・・・？」

そう思うと怒りがこみ上げて来る。そして・・・

カチッ

私の中で何かのスイッチが入った。

～フォルカ～

「くそ！こんな時に！」

こいつらと戦った事はない。でも俺とフェルナンドはゲームで知っているため問題はない。なのは、フェイトは問題ないが、フォワードは違う。初任務を終え、疲れきっている。

「フォルカどうする？」

「そうだな・・・おま『スバル！」どうした！」

フォワードの声の方に振り向くと、

「返せよ・・・お母さんを返せ！！！」

瞳を金色にしたスバルがアインストに突っ込んでいく姿だった。っくそ！

「フェルナンド！お前はスターズ、ライトニングとヘリを安全な所まで退避させろ。

俺はスバルを連れ戻してくる！」

「わかった」

フェルナンドはみんなの所へ行く。それを見た俺はスバルの元に向かった・・・

～スバル～

「あああああ！！！」

カシュ、カシュ

私は触手のような体の奴に近づき、カートリッジをロードし殴ろうとするが

「やめろ！スバル！」

フォル兄が後ろから抑えてくる。

「放して！フォル兄！私があいつらを」

私はフォル兄の拘束を無理やり解こうとする

「すまない、スバル」

ドスッ

「うっ」

首に痛みが走り、私は意識を失った・・・・

～フォルカ～

ヘリが着陸している所へ向かうとティアナ、エリオ、キャロが走ってきた。

「「「スバル／さん」」」

「心配するな、気絶してるだけだ。ヘリの中に寝かせてくれ」

「「「はい！」」」

フォワードはスバルをヘリの中に連れて行く。
それを確認し、俺はフェルナンド達の下に向かった。
そこにはＢＪを解除したフェルナンドとなのは、フェイト、ヴァイスがいた。

「フォルカ。スバルは？」

「無事連れ戻してきた」

ＢＪを解除しフェルナンドに答えると、なのは達は胸を撫で下ろしていた。

「そういえば旦那方、あれはなんなんすか？」

「それに、お母さんを殺したって・・・・」

「どういうことなの？」

まぁ当然の質問だな。だが

「今、答えている暇はない」

「それで、どうするフォルカ？」

「そうだな。俺とお前で奴らを叩く。なのは達はここで待機しててくれ。」

「フォルカ！二人だけじゃ危ないよ！」

「そうなの！」

フェイトとなのはが答える。心配してくれるのは嬉しいんだけどな・・・

「奴らの事をお前らは知らないだろ？だから知っている俺たちで行くんだ。」

「でも・・・」

フェイトは心配そうにこちらを見てくる。・・・しかたない

俺はフェイトに近づくと

ポフ、ナデナデ

「え？！」

俺はフェイトの頭を撫でながら、言う

「そんな心配すんなフェイト。俺たちはちゃんと帰ってくるから」

「う、うん／／／／絶対に戻ってきてね」

「おう」

「む～～～」

フェイトは顔を真っ赤にしながら答える。

そしてなのは。そこまでむくれなくても・・・・はぁ

むくれているなのは近づき

ポフ、ナデナデ

「ふぇ！？」

「そんな不機嫌な顔するな。ちゃんと戻ってくるから、な？」

「わ、わかったの。ちゃんと帰ってきてね／／／／」

フェイト同様に顔を真っ赤に染めるなのは。

後ろでヴァイスが「旦那も罪作りな男ですね～」と言っていたが無視無視

この時二人の事をかわいいと思ったのは内緒だ

そして腹を抱えて笑ってるフェルナンド・・・・おまえ死刑決定な・・・

～フェルナンド～

ブルッ！

「おう？！」

「どうしたんですか旦那？」

「い、いやなんでもない」

（なんだ。どこかで俺の死刑宣告された気がする・・・・）
その相手は近くにいるのに気がつかない、フェルナンドであった。

～フォルカ～

「それじゃあ、行ってくる」

「ヴァイス。後任せた！」

「「二人とも行ってらっしゃい」」

「旦那方、こちらは任せてください！」

そして崖から飛び降り

「アレス！」

「オーガ！」

『『はい！』』

「「セットアップ」」

『『わかりました／了解です』』

そして紅と蒼の光に包まれ、それぞれのＢＪが装備される。

「最初は二手に分かれてグリートを潰す。いいな！」

「へ、誰にもの言ってんだよ」

短くいい、二手に分かれた。

～フェルナンド～

「おらああ！！」

ドゴン！！

近くにいたグリートに飛び蹴りを喰らわせ破壊する。そして素早く地面に着地し隣のグリートを右アッパーで中に浮かせ、それを蹴り飛ばし遠くのグリートにぶつけ爆発する。

ブゥゥン！

「おっと！」

後ろから触手攻撃が来るがしゃがんで避け

「はぁぁ！」

ドス！

振り返り回し蹴りを当て、破壊。

『フェルナンド。楽しそうですね』

「ああ、久々に暴れられるからな。行くぞ、オーガ！」

『了解！』

そして、俺はグリートの群れに突っ込んだ

～フォルカ～

俺は右腕に覇気を溜め

「喰らえ！覇龍！」

放つ。それは龍の形で突き進み、進路上のグリート5体を喰らい破壊する。すると周りからグリートの砲撃が飛んでくる。

「アレスあれをやるぞ！」

『わかりました』

俺は地面を強く蹴り、空高く舞い上がり

「究ぅぅぅぅ極ぅぅぅぅぅ！！」

ポーズを決め、覇気溜める

「ゲシュペンストォォォォ！！」

溜めた覇気を右足に移し

「キィィィィック！！！！」

隕石のような蹴りをグリートにむけて放つ。

ドゴォォォォォォン！！！

それは3体のグリートに直撃し、盛大な爆発を起こす。煙が晴れると、直径２０ｍのクレーターの中に3体のグリートと、それに巻き込まれた5体のグリートの残骸があった。

「『・・・・・・』」

俺とアレスはその威力に唖然としてしまった。

『これは、封印しましょう』

「・・・・そうだな」

初めて繰り出したこの技は1回使っただけで封印となった・・・

～ヘリ内～

モニターでは隊長達とフォワード（スバルを除く）とヴァイスが二人の戦いをみていた。

な「これって魔力使ってないんだよね？」

フ「しかも、相手を素手で倒してる・・・」

エ「あ！フォルカさんが龍みたいなものを出しましたよ！」

キ「すごい！」

フ「くきゅ～～」

すごい、その一言だけだった。

ヴ「ん？なんか、フォルカの旦那がやろうとしてるッスよ」

ヴァイスの言葉でモニターに釘付けになる。

テ「何をするんでしょうか？」

するとフォルカさんが敵に蹴りを放った。すると

ドゴォォォォォォン！！！

『キャアアア！！』

爆発音とともにヘリが揺れた

フ「なんなの今の！」

慌ててモニターを見る。煙で見えないが、徐々に煙が晴れてくる。
そこに見えたのは・・・
「「「「「「・・・・・・・は？」」」」」」
大きなクレータの中にいる、フォルカさんと敵の残骸だった。
（あの技だけは絶対に禁止する）
とみんなが考えているが、
エ（いいなぁ・・・・僕もやってみたい）
エリオだけは、違うことを考えていた。
な「後は、骨みたいなのだけだね」
なのはの言葉でモニターに目を向けた・・・・
～フォルカ～
「お～いフォルカ～」
フェルナンドが駆け寄ってくる。
「そっちは終わったのか？」

「ああ。久々に暴れる事ができた、ってなにこれ！おまえなにやったの！？」

フェルナンドが指をさしたのは・・・・案の定俺が作ったクレーターだった。

「それは、後でみせてやるから。それに・・・」

俺は後ろを振り向く、そこには

「奴さんも待ちくたびれたみたいだしな。

「ヴォォォォ！」

叫び声を上げている、クノッヘンだった。

「行くぞ！」

「おう！」

俺とフェルナンドはクノッヘンに突っ込んでいった・・・

第15話「『究極ゲシュペンストキィィィック！』え？一回使って即封印！？」

長くてすいません。

ゲシュペンストキックはいい名前が思いつかなかったからです。

それとヒロインをハーレムにしました。

感想など待ってマース。

第１６話「母の仇をとれ！炸裂『奥義！轟覇機神拳』」（前書き）

長かった・・・・その一言です。

それでは・・・どぞ

第１６話「母の仇をとれ！炸裂『奥義！轟覇機神拳』」

第１６話「母の仇をとれ！炸裂『奥義！轟覇機神拳』」

～スバル～

ス「う、う～ん」

テ「スバル、気がついた？」

ス「うん。ティアここどこ？」

テ「ここは、ヘリの中よ」

・・・あれ？何で私気絶してたんだろ？

ス「ねぇ、ティアなんで私気絶してたの？」

テ「それは・・・」

な「それはスバルがアンノウンに突撃したのをフォルカさんが止めて気絶させたからだよ」

なのはさんが答えてくれる。

「そういえば、アンノウンはどうしたんですか！？」

な「今、フォルカさんとフェルナンドさんが相手をしてるよ」
ス「二人で！？大丈夫なんですか？」
フ「うん。後はもう1体だけだし」
フェイトさんの言葉でモニターを見ると、骨みたいな奴と二人が戦っていた。
エ「ちょっといいですか？」
フ「エリオ、どうしたの？」
画面を見ていたエリオがみんなに聞く
エ「この骨みたいな相手の右目を見てください」
その言葉で骨の右目に注目する。
キ「あれ？右目に傷がありますよ？」
フ「そうだね。・・・あれ？でも二人の攻撃はまだ当たってないよ？」
ヴ「前の戦いでケガでもしたんじゃないっすか？」
な「う～ん。どうなんだろう？」
みんなが考え込む。その中、私はモニターを見て呟く

「フォル兄、フェル兄・・・絶対勝ってね・・・・・」

～フォルカ～

「はぁぁぁ！」

「うおりゃああ」

ドゴォォォ！

俺とフェルナンドは同時に殴る。その中で俺は疑問に思っていた。

（なぜ、こいつの右目には抉られたような傷があるんだ？）

戦っている最中に見えた奴の右目は傷が付いていた。

（右目？どこかでそんな話をした記憶が・・・あの時か！）

フォルカはこのケガのことを思い出した。

～回想～

「フォルカ。お前の母さんを殺した奴がわかった」

「本当か！」

「ああ。情報だと骨のようなヤツだそうだ。
そいつはクイントの渾身の一撃を右目に受けたそうだ。
そしてそのケガは絶対に消える事はない、とヤツ（・・）は言っていた」

～フォルカ～

（それじゃあ、こいつが母さんを殺したヤツか・・・）

「はぁぁぁ！！」

ドス！

「ヴォォォォ！

蹴りを放ち、クノッヘンを吹き飛ばし、フェルナンドに言う

「フェルナンド！こいつは俺にやらせてくれないか？」

「お前、何いってんだよ！」

さすがに反対するか・・・だが

「こいつは、母さんを殺した本体なんだ、だから俺にやらせてくれ頼む！」

「・・・・わかったよ。でも！」

俺に指をさして

「必ず倒して戻ってこいよ!!いいな!!」

「ふっ、ああ。」

そしてフェルナンドはヘリの方に飛んでいった。

〜フェルナンド〜

俺はヘリに向かった。

な「フェルナンドさん!無事ですか!」

「ああ。ケガひとつしてねぇーよ」

この言葉を聴いて、安心した顔をするみんな。するとフェイトが近くに来る

フ「なんで、フェルナンドさんは戻ってきたんですか?」

「フォルカが言ったんだよ。『こいつは俺の母さんを殺した奴だから俺にやらせてくれ』ってな」

「「「「!?」」」」

全員ビックリする中、スバルは心配そうな顔をしている。

「スバル。そんな心配そうな顔すんな」

「でも・・・」

「あいつは大丈夫だから、見ててやろうぜ」

そういい俺はモニターを見た。

～フォルカ～

「ヴォォォ！」

両腕の爪を巨大化させ突っ込んでくるが・・・

ガシッ！

それを難なく受け止める。クノッヘンは両腕を振りほどこうと力を込めるが

「どうした？振りほどけないのか？」

ドゴン！

ブシャァァァァ！

「ヴォォォ・・・」

俺はクノッヘンを蹴り飛ばすと同時に、両腕を引き千切った。千切れた所からは緑色の血？見たいなものが流れてくる。クノッヘンはうめき声を上げながら立とうとする。

「そろそろ遊びは終わりだ・・・」

右手を上に左手を下にし、円のように流すように動かし、

「すべてを粉砕する！」

構えをとり

「はぁぁぁぁぁぁっ！！！」

ゴゴォッォォォ！！

体中から覇気を放出し大地が轟音をたて抉られるように削られていく。

大地は俺の立っているところ以外が消えていた。

この時フォルカは思った。

（なぜ？覇気の色が赤になっているんだ？）

そう。フォルカの覇気は青ではなく、赤色になっていた。

（今考えるのは後だ！）

「はぁっ！！」

そしてクノッヘンに突撃した。

～ヘリ内～

「すごい・・・」

心の中でみんなが思っていたが・・・フェルナンドとエリオは別のことを考えていた

フェ（覇気が赤色になった？あとで本人に聞くか・・・）

フェルナンドは覇気の色のことを考えていた。

エ（あれもカッコいいな！！教えてもらおうかな・・・）

やっぱり男の子だったエリオである。

～フォルカ～

クノッヘンに近づき、思いっきり右手を振りかぶり

「おりゃあっ！」

ドガァァァァ！

「ヴォォ！！！」

拳を叩き込む。そして構えを取り

「おおおおおおおおっ！！」

ドゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！！！！

何度も残像が残るくらいに拳を叩き込み。

「ヴォ・・ォ・・」

「でやあっ！！」

バキャアァ！！

すでにボロボロのクノッヘンに鋭いアッパーで上空に上げる。

そして右手に覇気を溜め

「貫け、覇龍！！」

グォォォォオオオオ！！！！

巨大な赤い覇龍を放つ。覇龍は巨大な口を開け、クノッヘンを喰らい、上空に上がっていく。

そして俺は叫ぶ！

「奥義！！！」

その技の名を！

「轟覇機神拳！！！！」

その瞬間

ドガァァァァン！！

「ヴォォォォ！！！！！」

クノッヘンを喰らった覇龍は、巨大な爆発を起こす。そらから、ドシャ、ドシャ、とクノッヘンの残骸が落ちてくる。

「これで、仇をとれたよ・・・母さん」

俺は天を仰いでそういった。

「それじゃあ、戻るか。アレス」

「はい！」

俺は帰路についた。ヘリに戻るとなのは、フェイト、スバルが抱きついてきた。

フェルナンドとヴァイスがにやにやとこちらを見ていたので殴り飛ばした。

ヘリの中では六課に着くまで色々と質問された

こうして、初出撃はハプニングがあったが無事に終わった。

六課についたらはやても加わり、永遠に質問される事になった。

第１６話「母の仇をとれ！炸裂『奥義！轟覇機神拳』」（後書き）

後半はぐだぐだです。

息抜きで新しい小説を書きました。よかったらそちらもみてください。

感想などお待ちしてます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7749w/

魔法少女リリカルなのはstrikers～転生した紅と蒼の修羅神～

2011年10月9日21時55分発行